

第三十二 ポーロ

聖保羅の耶蘇基督に於ける摩訶迦葉の釋迦牟尼に於けると。何ぞ行逕の相似たる甚しきや、兩人共に晩年の隨身たるに於て相同じ、基督に十二使徒あり如來に十大弟子あり、而して其の衣鉢を受傳へしは此の兩人なり、此の點に就ても殆ど逕庭なし、又兩人が未だ親炙せざるの初に當り、蓋天蓋地の至聖を自するに異端邪説の徒と以てし極力排斥に従事せるも相同じ、一は天の榮光に輝たれ一は甚深の微妙に接し、瞬間轉機之感發に觸着せるや殊に相同じ、保羅が耶蘇登天の後を承け、其の足跡を歐亞阿の三大洲に印し福音傳道に獻身せる、迦葉が佛滅後に於て一切藏經を結集し佛敎相傳の初祖となれる、二者の間毫も軒輊すべきなし、蓋し保羅は耶蘇の迦葉にして迦葉は釋迦の保羅なり、先きなる者唱へて後なる者和し、茲に初て聖敎流傳の源を開き混々として千萬年遂に竭るなし、若し保羅迦葉の後を承くるなかりせば縦ひ耶蘇釋

迦の至聖と雖ども、今日猶人心を感化するの餘芳を残す能はざりしやも知るべからず二人たる者の世界に於けるの地位高くして且大なる哉。
 且夫耶蘇の傳道たる時日甚だ短く、固より釋迦が四十九年間糜舌爛吻に似るべくもあらず、保羅たる者承繼の難き亦迦葉に十倍す、其の六十五の高齡に及ぶまで、席暖まるに遑あらざりしのみならず、囹圄の中にありても猶獄吏囚徒に接得し、循々として傳道に盡瘁せる如き、之を他に求むるも恐くは其の比類を發見し難かるべし、嗚呼此の堅強不撓の徇道者は如何にして其の終を告げしぞ。

殘忍にして猜疑深き猶太人は再びポーロを訴へて獄に投じぬ、此の時の羅馬帝は世界に有名なる惡虐無道のニーロなりき、渠は其の母を殺し其の妻を殺し、而して禽心獸行は日々夜々に増長し行けり、渠は有ゆる娛樂を盡しても猶慊らず、終に羅馬の都

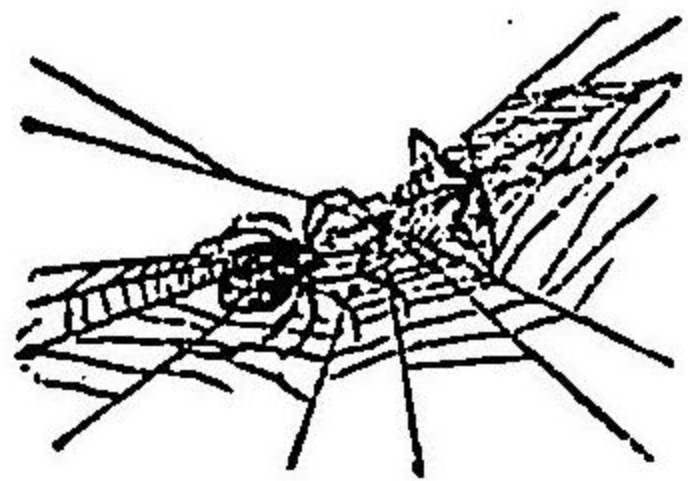
府を焼拂ひ城樓より望觀して快哉を買はむと欲せり、羅馬の府民は之を聞知するや否や憤怨激昂すること夜々の猛火よりも甚しく、相與にニーロの肉を啖はむと叫びぬ、道が猛惡無比のニーロも禍害の其の身に及ばむことを恐れ、百端都合好き遁辭を搜索しつゝありしが、恰も好し當時基督教は新に羅馬に傳播せられ、教徒と府民との間に不快乖離の情狀を醸しつゝありしかば、ニーロは之を好個の推諉物なりとし乃ち揚言して曰く、今回の大火は全く忌むべき基督教信者の所爲に出づ、彼輩天下を亂さむと欲し先づ我が羅馬の都府を灰燼と爲さむとするなりと、是に於て教徒迫害の獄は續々として起り、或は之を十字架柱に釘殺し、或は猛獸の檻中に投じて一滴の血をも餘さず其の枵腹に充たしめ、或は肢體に塗るに臘油を以てし之を庭上に立たしめ火を點じて其の苦死するを見て樂めり、ポーロは實に斯る時期に於て其上告を審理さるべく羅馬に護送せられぬ。

ポーロは固より朝露に均しき生命を貪惜するものに非ず、其の理想として疾く朽つ

べきの肉體を後にして無垢の精神界に入り、基督と共に居らむことを願望せしならむ然れども渠又自己の職分に重きを置けり、苟も生ある限り、呼吸の續かむ限り、兵卒にもあれ獄吏にもあれ審判官にもあれ王にもあれ誰にもあれ彼にもあれ、一人にても多く一日にても長く、渠が荷ふ所の福音傳道に盡瘁せむことを冀へり、斯てポーロは頑愚なる國民と戦ひ、其の身に降りかゝる有ゆる艱難と痛苦と戦へり、ポーロは漸く老衰しぬ、其の聲は枯れ其の面は凋み其の足は踉蹌しならむ、然れども其の精神は金剛不壞なりき、其の聲の絶ゆるまで其の面の血なきに至るまで其の足の動かざるに至るまで、飽まで行き飽まで説き以て己が職分を全うすると共に可憐の民をして天恵に浴せしめむと覺悟せり、是に於て乎遙々上告を爲さむが爲に羅馬に出でぬ、而して渠は自ら覺悟せし如く獄裡に在ると行路にあるとを問はず、兵卒獄吏囚徒に對して間かな隙かな傳道を怠らざりき、渠は自身を裁判せむが爲に威嚴を粧へる審判官に對して罪惡を悔悛すべきを勸告しぬ、然れどもポーロが人間世界に於ける生命は終に畢りを

告げぬ、渠は紀元六十八年に於て汚れたる刑場より潔き天の國へと昇り了むぬ。

那翁一世嘗て曰く、予は自殺して死を望むが如き卑怯なる者に非ずと、蓋し死は人生の最も難する所なるも、既に一たび決行すれば一切の責任と希望とを擧げて皆之を空滅に歸せしめ、因て以て生存の痛苦困迫を逃るゝを得るなり、ポーロが一日の生を長くせむと欲せし所のもの適々以て其の颯強不撓の雄心を見るべきなり。



第三十三 宗澤岳飛

宋の契丹に逼られて南遷するや、形勢日々に蹙まると雖ども、名將謀士未だ少しとせず、若し志を決して北嚮し、馬を中原の野に驅らば、其の興復或は期すべきに庶幾し、惜むべし在上不明にして秦檜一輩偷安姑息の徒權勢を縦まゝにし、閫外の將士をして怨を合で憤死せしめし者前後幾輩、而して宗澤岳飛兩雄の如き、其の用兵作戰伎倆、支那五千年の史中實に罕に見る所、其の人ありて其事遂げず、宋の滅ぶる亦命運の然らしむる所なるか。

宗澤が東京留守知開封府(官名)たりし時、金の兵留りて黄河の上に屯し、金鼓の聲日夕相聞ゆ、而して京城の樓櫓兵禍の爲に廢頽し、兵民雜居、盜賊縱橫、人情恟々

たり、澤威望素より著はる、任地に至れば首として賊を舎する者數人を捕へて之を誅す、命を下して曰く、盜を爲すものは、賊の輕重に關せず、悉く軍法に従て嚴罰を行はむと、是より盜賊屏息す、因て軍民を撫循し、樓櫓を修治し、屢々師を出して敵を挫ぐ、金はより敢て東京を犯さず、澤又金の將王策を河上に得、其の縛を解き厚待し、金の虚實を問ひ其の詳なるを得、遂に大舉の計を決し、諸將を召して謂て曰く、汝等忠義の心あらば應に力を協せて敵を勦し、二聖(徽宗宗欽二帝金の囚となる)を還して以て大功を立つべしと、言ひ訖て泣下る、諸將皆命を聽き、金人屢々戰て利あらず悉く引き去る、澤復上疏して帝の還京を乞て曰く、臣陛下の爲に京城を保護し去年より今春に至る、陛下早く回らずむば則ち天下の民何の依戴する所あらむと、報あらず、宗澤威聲日々に著はれ敵其の名を聞て常に之を尊憚し、南人に對して言へば必ず宗爺々といふ、澤益々群盜を招撫して城下に聚め、又兵を募り糧を儲へ諸將を召して將に日を約して河を渡らむとす、上疏して曰く、祖宗の基業惜む可し、陛下の父母兄

弟は沙漠に蒙塵して日々に救兵を望み、西京の陵寢は賊に占められ、今年寒食の節未だ祭享の地あらず、而して兩河二京陝石淮甸百萬の生靈は塗炭に陥る、乃ち南のかた湖外に幸せむと欲す、蓋し姦邪の臣、陛下の聰明を誤り各々其の私を濟すに出づ、今京城已に固を増し、兵械已に備足し、人氣已に勇銳なり、望むらくは陛下萬民敵愾の氣を沮みて、東晉歸覆の轍に循ふなかれと、又曰く、諸路の兵並び進みて河を渡らば則ち山寨忠義の民相應する者番に百萬のみならず、願くば陛下早く還京せよ、臣當に躬矢石を犯し諸將の先と爲るべし、中興の業立どころに致すべしと、澤常に云ふ、君父身を側て膽を嘗め、臣子乃ち安居美食せんや、自ら謂らく中原の克復冀ふべしと、帝の還京を請ふもの前後二十餘奏、皆中官汪黃に抑沮せらる、朝廷又其の變を爲むことを疑ひ郭仲旬を以て副留守と爲し之を監察せしむ、澤憂憤疾を成し疽背に發す、諸將入て疾を問ふ、澤慨然として曰く、吾二帝の蒙塵を以て積憤茲に至る、汝等能く敵を殲さば則ち我死するも怨なしと、衆皆流涕して曰く、敢て力を盡さむらむやと、

諸將出づ、澤歎じて曰く、『出師未捷身先死、長使英雄淚滿襟』と、亦一語の家事に及ぶなし、但『河を過ぐ』と連呼するもの三たびにして卒す。

岳飛は宋の名將なり、少くして氣節を負ひ沈厚寡言、家貧にして力學し、尤も左氏春秋孫吳の兵法を好む、力能く弓の三百斤弩の八石なるを挽く、又能く左右手を以て射る、宣和四年秉義郎に任せられ宗澤に屬す、澤大に之を奇なりとして曰く、汝が智勇才藝古良將と雖ども過ぐる能はず、然れども野戰を好む、是れ萬全の計に非ずと因て授るに陣圖を以てす、岳飛曰く、陣して而して後戰ふは兵法の常なり、運用の妙一心に存すと、澤其の言を是なりとす、是より將略を以て顯る、

宋南遷して康王位に即く之を高祖と爲す、飛上書數千言、大略謂ふ、陛下已に大寶に登り社稷主あり、已に敵を伐つ、謀を定めて、勤王の師日々に集る、彼方に吾を

素より弱しと謂へり、宜く其の怠りに乗じて之を撃つべし、黃潛善汪伯彥の輩聖意を承け恢復する能はず、車駕を奉じて日々に益々南す、恐くは中原の望を繋ぐに足らず願くは陛下敵の備の未だ固からざるに乗じ親ら六軍を率ゐて北渡せば、則ち將士氣を作し、中原復す可しと、職を越へて事を言ふに坐して官を奪はる、飛歸て河北の招討使張所に詣る、所待つに國士を以てし、假に脩武郎に補す、所問ふて曰く、汝能く幾何に敵するぞ、對へて曰く、勇は恃むに足らず、兵を用ゆるは先づ謀を定むるに在り、變枝が柴を曳て以て荆を敗り、莫敖が薪を採りて以て絞を致せるは皆謀定まればなりと、所懼然として曰く、君は殆ど行伍中の人に非ずと、飛因て説て曰く、國家汴に都し河北を待みて以て固と爲す、苟も要衝に憑據し要鎮を峙列し、一城圍を受れば則ち諸城或は撓み或は救ひなば、金人河南を窺ふ能はずして京師根本の地固からず、招撫因て能く兵を提げて、境を壓さば、飛惟命に是れ従はふと、所大に喜び假に武經郎に補し、即ち命じて王彦に従ひ河を渡りて新鄭に至らしむ、金の兵盛にして彦敢て

進まず、飛獨り所部を引て慶戦し、敵の懸旗を奪て之を舞す、諸軍争ひ奮ひ遂に新郷を復す、明日侯兆川に戦ひ身十餘創を被り士卒皆死戦して又之を敗る、會々食盡さ、王彦に詣りて糧を分たむことを乞ふ、彦許さず、岳飛乃ち兵を引て益々北進し、大行山に戦て金の將拓跋耶烏を擒にす、屏ること數日又敵と遇ふ、單騎其の將黑風大王を殺す、金人敗走す、飛王彦の己に快からざるを知り所部を率ゐて復宗澤に歸す、澤復以て統制と爲す、澤卒して杜克之に代る、飛故職に居て屢々戦功あり、建炎三年賊黃善曹成等衆五萬を合せて南薰門に薄る、飛が所部僅に八百、衆懼れて敢て敵せず、飛曰く、吾諸君の爲に之を破らむと、左に弓を拵み右に矛を運らし、横さまに其の陣を衝く、賊の陣列亂る飛乘じて奮撃し大に之を敗る、英州の刺史に補せらる、杜克將に建康に還らむとす、飛諫て曰く、中原の地は尺寸も棄べからず、今一たび足を擧げなば此の地亦我が有に非ず、他日之を取らむには數十萬の衆に非ざれば不可なりと、聽かず、金の將兀朮杭州に趨く、飛建康より之を廣徳の境中に追躡し、六戦して皆捷

ち其の將王權を擒にす、浮虜四十餘、其の用ゆべき者を察し結ぶに恩義を以てし、放ち還して夜營を斫て火を縱たしむ、飛敵の亂るに乗じ縱撃して大に之を破る、飛が軍に見糧なく將士饑を忍べども秋毫も犯すなし、金の徵發する所の士兵相謂て曰く、此れ岳爺々の軍なりと、争ひ降りて之に附く、四年金人常州を攻む、飛四たび戦つて皆捷ち、鎮江の東に襲ひ又撤ち、清水亭に戦つて、又大に捷つ、兀朮建康に趨く、飛伏を牛頭山に設けて大に之を破り遂に建康を復す、兀朮歸る、又靜安鎮に遯へ擊ち大に之を破る、嚴に所部を戢め居民を擾らしめず、士大夫寇を避る者多く頼りて以て免る、高宗岳飛に詔して南のかた戚方を討せしむ、方降る、乃ち通泰の鎮撫知泰州と爲す、飛辭するに淮東の重鎮は己が任に非ざるを以てし、北本路の州郡を收復し、機に乗じて漸く山東河北河東京畿等の路に進み次第に中原を復せんと乞ふ、許るされず、紹興元年張俊飛を請ひ同く賊徒李成を討つ、時に成が將馬進洪州を犯し、營を西山に連ぬ、飛曰く、賊徒貪にして後を慮らず、若騎兵を以て上流より生米渡を絶り

其の不意に出でば之を破らむこと必せりと、因て請ひて自ら先鋒と爲り、鎧を重ね馬を躍して潛に賊の右に出で、其の陣を突く、賊狼狽走て筠州に退く、飛追て城東に抵る、賊城を出で、陣を布くこと十五里、飛伏を設け紅羅を以て幟と爲し上に岳の字を刺繡し、選騎二百幟に随つて前む、賊其の少きを易り邀へて之に薄る、伏發し賊驚き走る、飛人をして聲々呼しめて曰く、賊に従はざる者は坐せよ、吾坐する者を殺さずと、賊兵争ひ坐し降る者八萬人、進で南康に向ふ、李成進が敗る、を聞き自ら兵十萬を引き來る、飛與に樓子莊に遇ひ、共に戦ひ大に之を破り遂に筠州江州を復す、群盜皆遁れ李成走りて齊に降る、賊張用なる者あり復江西に寇す、飛書を以て之に諭して曰く、吾と汝と郷里を同うす、戦はむと欲せば則ち出でよ、戦はずむは則ち降れと、用書を得て遂に降り江淮悉く平ぐ、張俊 飛が功を第一に奏す、詔して右軍都統制に進め洪州に屯して盜賊を彈壓せしむ、二年賊曹成衆十餘萬を擁し江西より湖湘を歴、道賀二州に據る、復飛に命じて之を討平せしむ、成飛の至るを聞き驚いて曰く、岳家

の軍來ると、即ち遁る、進て賀州に至り之を破る、成乃ち桂嶺より岩を置き北嶺に達し、隘道を連控し衆十餘萬を以て蓬頭嶺を守る、飛が所部八千人一鼓して嶺に登り其の衆を破る、成連州に走る、飛部將張憲徐度王貴に謂て曰く、成が黨散じ去る、追て而して之を殺さば、脅かされて従ひし者憫むべし、之を縱すときは則ち復聚りて盜を爲さむ、今汝等を遣り首惡を誅して餘衆を撫循せしむ、慎みて妄に殺して國家保民の仁を累はすこと勿れと、是に於て憲は賀連より慶は邵道より貴は彬桂より、降者二萬を招き飛と連州に會し進んで成を討す、成邵州に走る、三年飛に詔して度の賊を平げしむ、飛度に至る、賊鼓友衆を悉して迎戦ふ、飛躬ら兵を揮ひ馬上に即て之を擒にす餘黨退いて石洞を固む、洞高峻にして水を環し、止一徑の入るべきあり、飛騎を山下に列し皆滿を持せしめ、黎明死士を遣り疾く馳せて山に登らしむ、賊衆亂れ山を棄て下る、騎兵因て之を圍む、賊呼で命を乞ふ、飛令して殺すなからしめ其の降を受く、除慶等に方略を授け諸郡の餘賊を捕へしめ、皆破て之を降す、初め帝度賊の太后を劫

すの故を以て密に飛をして虔城を屠らしめむとす、飛首惡を誅して脅従を赦さむと力請す、帝之に従ふ、虔人其の徳を感じ繪像して之を祠る、既に賊を平げ入て見ゆ、帝「精忠岳飛」の字を手書し旗を製して以て之を賜ふ、江南江西沿江制置の職を授く、是の時に方り賊楊太齊の劉豫と謀を通じ流に隨て下らむと欲す、李成も亦既に襄陽に據り江西より陸行して浙に趨き太と會せむと欲す、飛奏すらく襄陽等の六郡は中原を恢復するの基本たり、今常に先づ六郡を取り以て心膂の病を除くべし、李成遠く遁れて後に兵を湖湘に加へ以て群盜を殄さむと、乃ち飛をして荆南制置使を兼しむ、飛江を渡り中流にして幕風を顧みて曰く、飛賊を擒にせずむば此の江を涉らすと、鄂州の城下に抵る、劉豫が將京超萬人の敵と號す、城に乗りて飛を拒ぐ、飛衆を鼓して登る、超敗れ崖に投じて死す、遂に鄂州を復し直に襄陽に趨く、李成迎へ戦ふ、飛馬を陣頭に立て笑て曰く、歩兵は險阻に利あり、騎兵は平曠に利あり、成左に騎を江岸に列し、右に歩を平地に列す、衆十萬と雖ども何ぞ能く爲さむと、鞭を擧げて王貴を

指して曰く、爾長槍の歩卒を以て其の騎兵を撃てと、牛車を指して曰く、爾騎兵を以て其の歩卒を撃てと、既に戦を合す馬は槍に應じて斃れ、後騎皆擁して江に入る、歩卒死する者無數、李成夜遁る、遂に襄陽を復す、又牛車をして隋州を復し王貴張憲をして唐鄧州を復せしむ、襄漢悉く平ぐ、捷報至る帝大に喜ぶ、飛乃ち奏して曰く、金人の愛する所は唯子女金帛のみ、志已に驕惰、劉豫僞偽して王と稱すと雖ども、人心終に宋を忘れず、如し精兵二十萬を以て直に中原を擣かば故疆域を恢復すること誠に力を爲し易し、襄陽隋鄧の地皆膏腴、苟も營田を行はゞ其の利甚だ厚からむ、臣糧の足るを俟ち即ち江北を過ぎ敵を剿くさむと、是の時南宋方に秦檜等の議を執りて姑息の和議を重むす、因て飛が深入の謀を納れず、然れども營田の議は此より興る、是に於て飛に清遠節度使を授く、四年十二月金齊兵を合して廬州を圍む、守臣援を飛に求む、飛牛車徐慶を遣して之を援はしむ、虜兵車を見て戦はずして潰ゆ、追撃三十餘里金人の死する者勝て計ふべからず、五年六月詔を奉じて楊太を討す、所部皆西

北の人にして水戦に習はず、飛曰く、兵何の常あらむ、之を用ゆる如何を願ふのみと
乃ち使を遣して謬て賊に與する者を招諭せしむ、賊黨黃佐其の下に謂て曰く、岳節度
が號令山の如し、若し與に戦は、萬に生理なし、往き降るに如すと、乃ち降る、飛表
して佐に武義大夫を授け、單騎其の部を按じ、佐が背を拊て曰く、汝は逆順を知る
者、果して能く功を立てば封侯豈道ふに足らむや、今子をして湖中に歸らしめ、其の
乗すべき者を視れば之を擒にし、勸むべき者は之を招がば如何と、佐感泣死を以て報
せむと誓ふ、時に都督張浚潭州に至る、人或は飛が寇を玩ぶを疑ひ以聞せむと欲す
浚曰く、岳侯は忠孝の人なり、兵に深機あり、何ぞ易言すべけむやと、其の人慚て止
む、黃佐歸り周倫が砦を襲ひ之を殺す、表して武功大夫に遷す、又伏を設けて賊を撃
つ賊走る、時に朝旨あり張浚を召して秋を防がしむ、飛小圖を袖にして浚に示す、浚
來年を俟ち之を議せむと欲す、飛曰く、已に定畫あり、都督能く小留すること八日な
らば賊を破るべし、浚曰く、何ぞ言の易きや、飛曰く、先に王四廂は王師を以て水寇

同く争ふ、是れ則ち難し、飛は水寇を以て水寇を攻む、是れ則ち易し、水戦は我短に
して彼長せり、短なる所を以て長せる所を攻む是れを以て難し、若し敵の將に因り敵
の兵を用ゐ、其の手足の助を奪ひ、其の腹心の託を離し、之をして孤立せしめ、而し
て王師を以て之に乗せば、八日の内當に諸會を俘にすべしと、浚之を許す、飛遂に鼎
州に如く、黃佐又楊欽を招ぎ來降す、飛喜で曰く、楊欽驍悍、今既に降る、敵の腹心
潰ゆと、表して武義大夫を授け禮遇甚だ厚し、乃ち復湖中に歸らしめ、夜賊營を掩ひ
其の衆數萬を降す、楊太固きを負ひて服せず、舟を湖中に浮べ輪を以て水を激し其の
行くこと飛ぶが如し、傍に撞竿を置き官舟之に接すれば輒ち碎く、飛乃ち君山の木を
伐りて巨筏を爲りて諸港汊を塞ぎ、又腐木亂草を以て上流に浮べて下り、水の淺き處
を擇び善く罵る者を遣はして之を挑ましむ、且つ行き且つ罵る、賊怒り來り追へば則
ち草木堆積し舟輪阻礙して行かず、飛急に之を撃つ、賊港中に奔り筏の爲に拒がる、
官軍筏に乗じ牛皮を張て矢石を蔽ひ巨木を擧げて其の舟を撞き盡く壞る、太技窮し

水に赴いて死す、飛賊壘に入り其の衆二十餘萬を降し、親ら諸砦を行り之を慰撫す、老弱は歸田し少壯は軍に留む、果して八日にして捷書潭に至る、凌嘆じて曰く、岳侯は神算ありと、是に於て湖湘悉く平ぐ、

六年岳飛京湖宣撫副使たり、張浚帥を淮上に撫す、飛をして襄陽に屯し以て中原を圖らしむ、謂て曰く、是れ君が素志なりと、飛累戰皆捷つ、牛阜を遣はして河南の長水縣を復せしむ、浚之を聞て曰く、飛が措畫甚だ大なり、今已に伊洛に至る、則ち大行一帶の山砦響應する者あらむと、已にして果して然り、累りに齊の連城を復して蔡州に至り其の城に克つ、又王貴等を遣はして虢州の盧氏縣を復せしめ糧十五萬石を獲、劉豫唐州を窺ふ、飛攻めて之を破り因て中原を進取せむことを奏す、許されず乃ち鄂に還る、

七年飛鄂より入見す、大尉に拜せられ繼で宣撫副使に除し、王德鄜瓊が兵を以て之に隸せしむ、飛數々帝に見へて恢復の畧を論ず、謂ふ金人の劉豫を立てし所以のもの

は、蓋し中原を荼毒するに中原を以てし、彼因て休息しながら聲を觀むと欲するのみ願くは陛下臣に假すに日月を以てせよ、臣兵を提げて京洛に趨き、阿陽陝府蒲關に據り五路の叛將を號召せむ、叛將既に還り王師之に繼て前進せば、豫必ず汴を棄て、走らむ、河北京畿陝右以て盡く復すべし、然る後兵を分ち兩河を經營せば、逆豫擒となり金人滅すべく、社稷長久の計實に此の舉に在りと、帝曰く、臣あること此の如し朕何を憂へむと、召して寢閣に至らしめ之に命じて曰く、中興の事一に以て卿に委ぬと、飛方に大舉を圖る、宰相秦檜和議を主として之を忌み、德瓊の兵を以て飛に隸せず、飛又張浚に詣り事を議す、浚問ふて曰く、王德は淮西軍の服する所、以て都統と爲し、呂某に命ずるに督府の參謀を以てし軍を領せしめむと欲す如何、飛曰く、德と鄜瓊とは素より相下らず、一旦之を握て上に置ば二人必ず争はむ、呂は軍旅に習はず恐くは衆を服するに足らず、浚曰く、張俊楊沂中は如何、飛曰く、張宣撫は飛が舊帥なり、其の人暴にして謀寡し、楊は德等と視ふるに等しきのみ、亦豈に能此の軍を

御せむや、浚艶然として曰く、固より大尉に非ざれば不可なるを知ると、飛曰く、都督正を以て飛に問ふ、飛敢て其の愚を盡さずむばあらず、豈に軍を得るを以て念と爲むさやと、即日表して母の喪を終へむと乞ひ(飛が母前年歿す、詔して強て飛を起しめしなり)張憲を以て軍事を攝せしめ、徒歩して廬山に歸り母の墓側に廬す、浚怒り張宗元を以て宣撫判官と爲し其の軍を監せしむ、帝累に詔を下し飛を趣して職に還らしめむと欲し、幕廬に命じ廬に造り以て請しむるに至る、飛乃ち起ち朝に趨いて罪を待つ、帝慰諭して之を遣る、宗元還て言す、士悦び將和し、人々忠孝を懷く、皆飛が訓養の致す所と、帝大に喜ぶ、飛鎮に至りて奏言すらく、嘗て寢閣の命を受く、咸謂らく聖斷已に堅しと、何ぞ今に至るまで尙未だ決せざるや、臣願くば兵を提げて進討し、天道に順ひ人心に因り、曲直を以て老壯と爲し、逆順を以て強弱と爲さば、萬全の效必ずし、錢塘は海隅に在り武を用ゆるの地に非ず、願くば都を上游に建て、親ら六軍を率ゐり往來して戦を督せよ、庶くは將士聖意の向ふ所を知り人々命を用む

と、時に金人劉豫を廢せむと欲す、飛間を放ち臘書を齎して豫と約し、同く兀朮を誅せむとす、兀朮大に驚き馳て金主に白し遂に豫を廢す、飛乃ち豫を廢するの際に乗じ其の備なきを擣き、長驅して以て中原を取らむと奏す、報せられず、九年秦檜和を議し謂らく、金人將に河南の地を歸さむとすと、飛抗言して曰く、金人は信すべからず、和好は恃むべからず、相臣國を謀る賊らず、恐くは後世の譏を貽さむと、檜之を衝む、飛又和議の非なるを力陳し、願くは謀を全勝に定め、地を兩河に收むるを期し、手を燕雲に唾し讐を復して國に報じ、心を天地に誓て尙くは稽首して藩を稱せしめむとの語あるに至る、檜益す怒り遂に仇隙を成す、和議成る例を以て爵賞を加ふ飛に儀同三司を加ふ、飛辭して受けずして曰く、今日の事危むべくして安むすべからず、憂ふべくして賀すべからず、兵を訓じ士を飾へ謹で不虞に備ふべくして、論功行賞笑を敵人に取るべからずと、三たび詔して受けず、帝温言之を奨諭す乃ち命を受く、十年帝札を賜ひて曰く、設施の方一に以て卿に委ね、朕遙に度らずと、飛乃ち王貴

牛車楊再興李寶等を遣り西京汝鄭穎昌陳曹光蔡諸郡を略せしめ、又將に命じて河を渡り忠義社を糾合し河東北の州縣を取らしめ、又兵を遣し東劉錡を援ひ西郭浩を援はしめ、自ら其の軍を以て長驅して中原を闢ふ、將に發せむとするに臨み、密に奏言すらく、先づ國本を正うして以て人心を安むじ、然る後厥の居を常にせずして以て復讐を忘るゝなきの意を示すべしと、李寶牛車相繼で金人を京西に敗り、諸將亦相繼で捷を奏す、飛大軍を穎昌に留め、諸將に命じ道を分けて出で、戰はしめ、自ら輕騎を以て郟城に駐まる兵甚だ銳し、兀朮大に懼れ諸帥を會し力を併せて一戰せむと欲す、飛曰く、金人技窮すと、乃ち日々に出で戰を挑み且之を罵る、兀朮怒り龍虎大王蓋天大王及び韓常の兵を合せて郟城に逼る、飛其の子雲をして騎兵を領し直に敵陣を貫かしむ、之を戒めて曰く、勝すむば先づ汝を斬らむと、雲金人と戰ふこと數十合、敵尸野に布く、兀朮揚子馬萬五千を率ゐて來る、飛歩卒をして人毎に麻札刀を持たしめ、令して曰く、仰ぎ視る勿れ、第馬足を斫れと、揚子馬相連なり一馬仆るれば二馬

行く能はず、飛が軍奮撃之に乗じ遂に大に之を破る、兀朮大に慟哭して曰く、海上兵を起してより以來皆此を以て勝てり、今や已ぬと、因て復兵を益して前む、飛自ら四十騎を以て突戰して之を敗る、兀朮夜遁れ中原震動す、飛子雲に謂て曰く、賊屢は敗る、必ず還て穎昌を攻めむ、汝宜く速に王貴を援ふべしと、既にして兀朮果して至る、貴が將游奕、雲が將背嵬城西に戰ひ、雲騎兵八百を以て挺前決戰す、歩卒左右翼を張め之に繼ぎ、兀朮の壻夏金吾を殺す、飛又梁興をして太行の忠義と兩河の豪傑とを會し金人を垣曲に敗らしめ、又之を沁水に敗る、遂に懷衛州を復して金人の山東河北の道を絶つ、金人大に恐る、飛進で朱仙鎮に軍す汴京を距ること四十五里、兀朮と壘を對して陣す、背嵬の騎五百を遣り奮撃して大ひに之を破る、兀朮汴に還る、飛陵臺に檄して行々諸陵を視て之を葺治せしむ、西河の豪傑李通等衆を帥ゐて歸す、飛是れに由て金人の動息、山川の險要皆其の實を得、兵勢益す振ひ、中原諸郡の豪傑皆日を期し兵を興して官軍と會せむとす、其の掲ぐる所の旗岳を以て號と爲す、父老

百姓争て車を挽き牛を牽き糶糧を載て以て義軍に饋り、盆を頂き香を焚き迎候する者道路に充滿す、燕より以南金人の號令行はれず、兀朮兵を募り以て飛に抗せむと欲すれども、河北亦一人の應ずる者なし、乃ち嘆じて曰く、我北方に起りしより以來、未だ今日の挫衄の如きあらずと、金の將馬陵思謀素より驍勇桀黠と號す、亦其の下を制する能はず、但之を諭して曰く、輕しく動く勿れ、岳家の軍の來るを待て即ち降らむと、金將千鎮等皆所部を率ねて降る、龍虎大王の將乞查等も亦密に飛が旗榜を受け其の國より來り降る、韓常も亦衆五萬を以て降らむと欲す、飛大に喜び其の下に語つて曰く、直に黃龍府に到り諸君と痛飲せむのみと、方に日を指して河を渡らむとす、而して秦檜和議を割進し、臺臣に諷して師を班さむことを奏請せしむ、飛乃ち奏して曰く、金人銳氣沮喪し盡く輜重を棄て、走て河を渡り、而して我が豪傑風に向ひ、士卒命を用ゆ、時再び來らむ機輕しく失ひ難しと、檜飛が志の銳にして回すべからざるを知り乃ち先づ張俊楊沂中等をして歸らしめ、而して後上言すらく飛孤軍久しく留

むべからず、乞ふ師を班さむと、飛一日に十二金字牌(勅使の章)を奉ず、乃ち憤惋泣下り、東面再拜して曰く、十年の功一旦に廢すと、終に師を班す、居民皆馬を遮り慟哭して訴へて曰く、我等の官軍を迎ふる金人皆之を知る、相公去らば我輩唯類なからむと、飛も亦涙を垂れ詔を取り之を示して曰く、我擅まゝに留まるを得ずと、哭聲野に震ふ、飛爲に留まること五日、以て民の徙るを待つ、從て南する者市の如し、飛奏して漢上六郡の間田を以て之に處しむ、初兀朮の朱仙鎮に敗るゝや汴を棄て、去らむと欲す、書生あり馬を叩て曰く、太子走る勿れ、岳少保其の身すら且に免れざらむとす、況や成功を欲するをやと、兀朮悟り乃ち留る、飛の還るに及び兀朮兵を遣して之を追ふ及ばず、而して河南新復の府州皆復金の有と爲る、飛鄂に至り兵柄を解かむことを力請す許さず、入見するに及び帝之を問ふ飛唯拜謝するのみ、亦怨言なし。

十一年金人道を分つて淮を渡り、飛師を率ゐて濠洲を救ふ、奏すらく金人國を舉り

て南に來る、巢穴必ず虚ならむ、若し京洛に長驅して之を擣かば彼必ず奔命に疲れむと、帝從はず、飛方に寒嗽に苦む疾を力めて行く至れば則ち濠洲已に陥いる、元尤飛の至るを聞き戰はずして遁る、飛を召して樞密副使を授く、飛固く兵柄を還さむと請ふ、詔して張俊と同じく楚州に往き邊防を措置し韓世忠が軍を撫さしむ。

初岳飛諸將の中に在りて年最も少く、列校を以て身を起し累に顯功を建つ、其の張俊と地位を同うするに及び、飛常に己を屈して之に下る、然れども俊心に平なる能はず、金人淮西を攻む、俊躊躇して前まず、糧少きを以て飛を怵らす、飛爲に止らず、帝札を賜ひ褒諭す、文中に餉を轉ずる難阻、卿復顧すといふの語あり、俊飛が言を漏すを疑ひ朝に還りて反て倡言すらく、飛逗留進まず餉乏しきを以て辭と爲せりと、張俊固より韓世忠が秦檜の意に忤ふを知り、世忠を排し飛と其の軍を分たむと欲す、岳飛義之を肯せず、俊益す悦びす、既に楚州に至る、俊城を修めて備を爲むと欲す、飛曰く、當に力を戮せて恢復を圖るべし、豈に退保の計を爲すべけむやと

俊色變ず、會ま秦檜事を以て韓世忠を陥れむと圖る、飛書を馳せ世忠を戒むるに檜の意を以てす、世忠帝に見へて自ら明かにし遂に事なきを得たり、張俊之に因て大に飛を憾み密に飛が世忠に報せるの事を以て檜に告ぐ、秦檜是に於て大に怒る、張俊岳飛既に還る、飛は復出で、兵を掌らす其の僚屬多く散す、之に因て檜復飛を憚らず、岳飛恢復を以て己の任と爲し肯て和議に附隨せず、嘗て檜が奏議を讀み、徳に常師なし善を主とするを師と爲すの語に至り、悉て曰く、君臣の大倫は天性に根す、大臣にして面り其の主を欺くに忍びむやと、元尤檜に書を遣て曰く、汝朝夕和を以て請ふも、岳飛方に河北を收むるの圖を爲す、必ず飛を殺して始て和すべしと、檜も亦飛死せずむば終に和議を極ぎ、己必ず禍に及ばむことを懼れ、遂に中丞何鑄待御史羅汝楫諫議大夫万俟卨に諷し、交々上章して飛が旨を奉じて淮西を援ひ暫く舒漸に至て進まず、張俊と兵を淮上に按じ山陽を棄て、守らざらむと欲せりと論劾せしむ、乃ち飛を罷めて萬壽觀使と爲す、檜又張俊と謀り密に飛が部曲を誘ふに能く飛が陰事を

告ぐる者あらば重賞を興ふるを以てせしも率に應ずる者なし、乃ち王貴を劫し統制王
 俊を誘ひ、張憲が飛に兵柄を還すを謀ると誣告せしむ、張憲を掠治して自ら飛が子雲
 の手書を得たりと誣しめむと欲す、憲拷掠せられ完膚なきも竟に屈せず、槍又詔を
 矯めて飛が父子を捕ふ、使者至る、飛笑て曰く、皇天后土此の心を表す可しと、初め
 何鑄に命じて之を鞠せしむ、飛裳を裂き背を以て鑄に示す、『盡忠報國』の四字あり
 深く膚理に入る、既にして悶するに實に左驗なし、槍に詣り其の宛を白す、乃ち改め
 て万俟卨に命す、高靈申探報百方羅織して以て朝廷を動かし飛を繋ぐこと兩月、然れ
 ども事の遂に證すべきなし、大理卿薛仁輔等百口を以て飛が他なきを保し且曰く、中
 原未だ靖からずして禍忠義の士に及ぶ、是れ二聖を忘れて中原を復するを欲せざるな
 りと、聽れず、韓世忠心平なる能はず槍に詣り其の實を詰る、槍曰く飛が子雲が張
 憲に與ふるの書明ならずと雖ども、『其事莫須有』(其の事有る等なりといふが如し)
 世忠曰く、莫須有の三字何を以て天下を服せむと、歳暮れて獄成らず、一日槍小紙に

手書して獄吏に付す、即ち報す飛死すと、年三十九、雲と憲と皆棄市せられ、其の宗
 族を藉して嶺南に徙す、薛仁輔等皆黜けらる、布衣劉允升上書して飛が冤を訟へ大理
 の獄に下されて死す、洪浩金に在り蠅書を馳せて云ふ、金人の畏る、所惟岳飛、之を
 呼で岳父と稱するに至る、其の死するを聞くに及び酒を酌みて相賀すと。
 飛忠孝天性に出づ、初駕に従つて河を渡るや妻を留めて母を養はしむ、河北陷いる
 に及び人を遣はして訪求せしむる凡そ十八たび往返して乃ち獲て迎へ歸る、母疾あれ
 ば藥餌必ず親す、母死して水漿口に入らざる者三日、既に葬りて墓側に廬して喪を守
 る、御札之を強ること數四而して後に起つ、敵難ありしより志を立てること慷慨、必
 ず中原を復し讐耻を雪ぐを以て念と爲し、危きに臨み衆に誓ふ或は流涕するに至る、
 士皆感奮す、飛居常未だ嘗て車駕の在る所に背いて坐せず、至性皆此の類なり、後鄂
 王に追封し武穆と諡す。

* * * * *

支那歴代中人物の濟々たるは實に宋を以て最と爲す、而して相は則ち韓魏公、將は則ち岳武穆、餘は皆雁行して僅に相及ぶに足るのみ、審に岳公の性行を按ずるに、最も我が日本の精華と相類せる者あり、茲に殆ど其の全傳を掲ぐるは豈唯一片好事の情のみならむや、聞く彼の土の錢塘に岳公の噴墓あり、題して『宋鄂王之墓』と云ふ、門を入れば噴前數個の小石像あり、皆墓石に向て低首の狀を爲す、蓋し秦檜張俊何錡羅汝楫万俟卨等の數奸に擬するなり、人の鄂王墓に賽する者必ず先づ此の數奸の頭上に尿するを例と爲べし、臭穢鼻を衝き殆ど近くべからずと、蠻習と難ども亦千載奸邪の徒を懲すに足る、獨り怪む支那今日の國勢復東清南宋覆轍の歴史を繰返すに似たり、而も一人の岳飛祖述の流風を受くる者なく、滿朝却て秦檜等の徒をして跳梁を恣まゝにせしむるは何ぞや、叙し畢て西天を望み惻然たるもの良久。



第三十四 ローツ

英國現代の巨人、南阿の無冠王セシル、ジェー、ローツは本年三月二十六日を以て逝けり、渠蓋世の雄姿を以て人間世界を濶歩すること僅に四十九年、而かも個人としては赤手を揮て幾億の富を博し、公人としては絶大の事業を建て、世界の人物傳中に又一個の偉麗壯觀を添へたる彼果して何人ぞ。

ローツは千八百五十三年を以て英國のスタラッドフォールドに生る、スタラッドフォールドは詩聖沙翁を生誕せるの地なり、父は貧しき僧侶なりし、ローツ千八百七十二年を以てオックスフォード大學に入りしが身體虛弱の故を以て中途にして大學を去り、養病の爲に飄然として南阿に入り、其の兄と協同して有名なるキンバニーに於て金剛石の採取を試みしが幸にして多少の利益を得たり、ローツ乃ち其の所得を懐にして英國に歸り、再びオックスフォード大學に入れり、是れより千八百八十一年に至るまで、屢々大

學を辭して南阿に赴きしが、同年終に大學を卒るを得たり、大學を卒へて後ローツは直に南阿に赴き益々寶石の採取に専心銃意して、其の計畫は着々として功を奏し、終に實業上に政治上に大勢力を占め、今や南阿の一角には其の姓に因めるローデシヤと名けられたる一地域を見るに至れり、斯てローツが香宇吐宙底の意氣は益々盛にして、茲に南阿を併呑して更に大なる大英帝國を建設せむと期したり、而して遂に英國植民大臣ヂャムバーンインを操縦して、トランスバール征討の軍を興さしめ、三年の久しきを経て猶砲煙の南天に漲るを致せるは、則ちローツが理想實行の序幕に外ならず、然るに天此の風雲兒の年を奪ひ忽然として過去の人となしぬ。

ローツの將に限せむとするや、兄弟親友の名を呼び、更に「事業は多くして成す所は尠し」と長嘆して絶息せりと傳へらる、此の最後の一言こそ渠が性格如何を表明し

て餘あり。

ローツの遺言として新聞紙の報ずる所左の如し。

ローツの遺言に曰く、英米獨の三國親交して戻る無くんば乃ち天下の平和を維持するを得可し、而して最も強き繫鎖を作り得るものは實に教育的關係なりと、恚くて彼は遺産の一部を以て米獨及び英國殖民地より學生を選定し之に給資するを命じたり。

其方法の獨逸皇帝の選抜したる學生五名、米國の各州より二名宛の選拔生及び英國殖民地の優等生をワツクスフォード大學に送らしめ、其學資を給するにあり。

ローツは又自らの墓地に就て遺言し、マトボ、ヒルの自然石に穴を鑿ちて其の中に遺骸を安置し墓地の附近には他人を埋葬することを許さず、毎年四萬圓の保存費を充て、且つ鐵道を延長して參詣者の便に供す可しと云へり。

ブルウアヨー及びサリスベリー(マタベルランドに在り)附近の地所は悉く之を

保管人に遺囑し、之を耕作して以てローヂヤ人の教育費に充つ可しと遺言せり。

クープ、タウンより遠からざるグルト、シニールに在る莊嚴なる別墅は南阿共和政府總理大臣の住宅となし、保存費一萬圓を毎年給することせり。

彼は又百萬圓をフリエル大學校に寄附し、逐一其用途を指示して且つ曰く、學校擔當者は世を離れて住み、商業に就ては宛から赤兒の如きものなり、故に寄附金の用途に就ては時々余の依托者に相談す可し、彼等の勸告意見は大に利益となるならんと。

ダルハムに在る土地は之を弟フランシス、ウイリヤム、ローツ及びアーネスト、フレドリック、ローツに分與し、且つ相續者の資格を定めて、軍役の外必らず或一定の職業に十年以上従事したるものならざる可からず、若し相續者小兒なる時は成年の後一定の職業に十年従事せざる可からず、然らざれば相續權を失はしめざ

る可からずと、彼は苟も人たる以上は必らず一定の職に努力せざる可からずとするなり、彼は産を遺すが爲に怠惰なる富者を作るとを恐れたるなり。

テリー、テングラの言に依るにローツの遺産は六千萬圓なりと云ふ、而して彼の最も注意したるは遺産を教育に利用するに在りたるもの如く、給費生に關しては詳細なる命令を残し、學生を選抜するに人種信教の如何を問ふ勿れと云ひ、給費生卒業の後は或格別なる學校の爲にのみ盡力す可からず、可成總ての大學の爲に盡す所ある可しと云ひ、給費生の黜陟權を委託者に一任し、又委託者は一年一度必ず學生の爲に大宴會を催して彼等の親交を圖る可しなど云へり。

ローツは實に終身無妻主義を持したるを以て其の残せる巨億の産を相續するの子孫なかりしなり、而も渠が遺産の大部分を擧げて教育に投じたるは遺がに其の人物を見るに足るなり。

* * * * *

ローヅの南阿に於けるはクライブやヘスチングの印度に於けると其の行跡相似たり、渠は萬事に就て實行を期したるは那翁と其の性格を同うせり、渠眼光常に大局面に注ぎて公共に盡瘁し、自己の主義の爲めには巨財を擲つこと塵芥の如く、顧みて世の滔々たる富豪を嘲笑し「彼等は唯是庫中の安全鍵のみ」と揶揄せり、味方よりは嚴父の如く敬はれ敵よりは惡魔の如く忌まれ、羅馬のオーガスタスにクロムウエルの甲冑を帯はしめイグナシヤス、ロヨラの鞋を穿しめたる人の如しとの批評ありしも此の人なり、常にダーウキン等の説に賛し、進化論を唯一の信仰個條となし、優勝劣敗の理により帝國主義を確信して大英國殖民地統一策を建てしものも此人なり、近世のペーヤード英國の奇傑と稱せられたるゴルドン將軍と性格殆ど相反するものあるに係らず、公共の主義を同うし意氣相投じて、蘇丹遠征の同行を勧誘せられしも亦此人なり、南阿否阿弗利加大陸統一の大經綸より割出し、大陸縦貫の大鐵道及び電線敷設に着手し、トランスヴァールを討滅せんと計りしも亦此人なり、觀じ來れば其性行に汚

點なきにあらず其事業に缺陷なきにあらずと雖ども兎に角當代の人豪たるは何人も首肯する所ならむ、更に詳なる批評を聞かむと欲せば雑誌日本人に三宅雪嶺博士の論文一篇あり就て見るべし。



第三十五 白 虎 隊

國破山河在、城春草木深、此れは是れ詩人が亂後の光景に對する傷懷の涙なり、今人あり猪苗代の湖水を航り崎嶇たる山道を経て會津の平野に出で、群山環繞の裡別に一寰を開き、田野開け人烟稠きを見るならば、道がに古昔二十五萬石の大名が治績の跡を忍ばるゝなるべく、更に杖を曳て若松の舊城址に至り、殘墨草に掩れ、古木風に悲しむの狀を實見せば、如何に冷腸の人にもせよ油然として戊辰當時の慘狀を追想せざるものあらざるべし、然るときは又自然の情として彼白虎隊なる少年壯士等が世にも稀れなる勇しき最後を髣髴として眼前に幻出すべく、而して其の足指は知らず識らざるの間に、城を隔る半里程の飯盛の岡に向ふならむ、此の岡は彼の少年等が忠義の鮮血を濺ぎし處にして、老松古杉の間より遙に若松の城を望むべし、上に一貞石を立て長く烈魂を鎮す、文は會津の老武者故の陸軍少將山川浩の撰にかゝる、今之を録す。

す。

* * * * *

慶應戊辰八月二十三日白虎隊の士十有九人自刃して難に殉す、初我が會津藩の敵を四境に受るや、丁壯は皆出で、成り、城下の守備固からず、乃ち日新館の年少生徒を聚めて隊伍を爲り白虎隊と號す、石莖口守を失ふに及び、西軍長驅して將に鶴城を擣むとす勢ひ頗る鋭なり、我が軍之を戸口原に逆ふ、白虎隊も亦其の中に在り、勇を奮て激戦し互に死傷あり、而して衆寡敵せず遂に大に敗る、諸士乃ち將に還て城に入らむとし、仄徑より飯盛山に至る、時に西軍本道の兵を尾撃して城下に達す、駭聲地に震ひ煙焔天に漲る、諸士火を望み以爲らく城陥ると、相謂て曰く、事既に此に至る、惟一死以て臣節を全うする有るのみと、遂に屠腹して死す、既にして印出某の母其の子を索ねて山中に到り、死屍枕藉、鮮血地に塗るゝを見、遍檢して獲ず、惟一年少あ

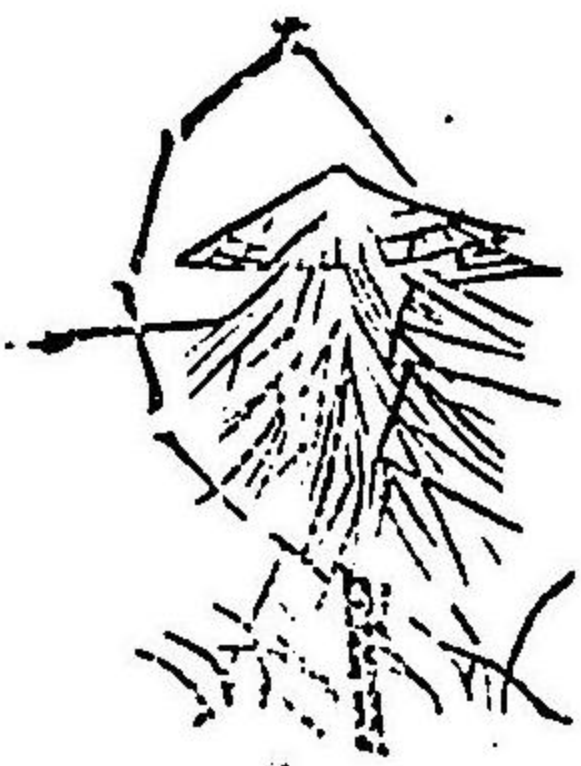
り氣息奄々尙未だ殊へず、之を負ふて而して歸る、則ち飯沼貞吉なり、貞吉詳に諸士殉難の状を語ると云ふ。(原漢文)
曇りなき月日は照らせ國のためさらし、かばねぐちやはつとも

白虎隊は碑文にも見ゆる通り藩校日新館の生徒を編制し藩の世子の護兵と爲したるものにして其の年齢は十六歳十七歳に限り、一隊三十八人にして佛式の訓練を受けたりと云ふ、今殉難者の姓名を列擧すれば左の如し、

- | | | | |
|--------------|-------|-------|-------|
| 飯沼貞吉(蘇生)林八十治 | 築瀬勝三郎 | 津川潔美 | 篠瀬竹次 |
| 永瀬雄次 | 西川勝太郎 | 野村駒四郎 | 井澤茂太郎 |
| 篠田義三郎 | 鈴木源吉 | 間瀬源七郎 | 伊藤俊彦 |
| 有賀織之助 | 石山卯之助 | 伊藤悌次郎 | 池上新太郎 |
| | | | 竹岡捨藏 |
| | | | 安達藤三郎 |
| | | | 石田和助 |
| | | | 篠田義三郎 |
| | | | 永瀬雄次 |
| | | | 飯沼貞吉 |

飯沼貞吉出陣の際に當其の母一首の歌を與ふ、

梓弓むかふ矢さきは繁くとも引きなかへし武夫の道
當時會津の士氣婦人も亦此の如し、此の年少烈士を出せる決して偶然に非ず。



第三十六 ハミルトン

北米合衆國建國の元勳アレキサンダー、ハミルトンが臨死こそ觀ものなれ、ハミルトン既に劍を提げ華盛頓を助けて獨立の偉業を全うし、更に筆を執て憲法を定めて百世の典範を垂れ、轉じて牙籌を執り財政を整理して保護政策の基を建て、合衆國の國礎茲に確立して終天不動のものとなれり、ハミルトンの功業は實に此の如くにして華盛頓と表裏して米國百世の恩人たり、嗚呼此の絶代の雄材は端なく政敵の毒網に罹り、決闘場裡一往返らざるの英魂となりぬ、今少しく其の由來を説明せむに、ハミルトン藏相の印綬を解てより以來専ら辯護士の業に従事し、其の業務の擴張を圖るの外他念なかりしが、其の雄材と聲望とは深く國民の推服する所なれば、自ら求むるに非ずして遂にニューヨーク州合衆黨の首領となり其の政敵ブルと衝突するに至れり、ブルは共和黨の首領にして詐謀術策に富み、其の野心は炎々として火山の如く、頗る危

險なる人物なりしを以て、ハミルトンは常に之を抑制して要地に立つを阻害したり、ブルが千九百年共和黨の候補者として同黨の先輩ジャファルソンを出し抜き自ら大統領とならむとするや、ハミルトン早くも其の陰謀を看破して、彼れが如き人物をして國家最高の任に上らしむべからずと爲し、ジャファルソンを助けて大統領たらしめ、而してブルを副統領の地位に置き、之をして空く虚名を擁せしめぬ、然るにブルが燃るに似たる野心は之に満足する能はず、更に方面を轉じてニューヨーク州知事の職を博取せむとするや、又之を抑制して野心を遂る能はざらしめたるはハミルトンの勢力なりき、是に於てブルがハミルトンに對する怨恨骨髓に徹し、ハミルトンの存する内は己が野心を達するの期なきを知り、陰險兇惡なる手段を施してハミルトンと開戦の口實を作り、之に因て曲直を決闘に訴ふるの申込を爲したり、斯る言ひかゝりの決闘を排斥して之に應せざればとて、士人の徳操に於て敢て耻づべきに非ずと雖ども、ハミルトンは其の性として一毫も人に加へらるゝを好まず、且軍人として體面を維持

し名節を砥礪するに於て、遂に避くべからざるの境遇に在り、死を決して之を承諾するに至りぬ、ブールは決闘界老功のくせものにして是れまで共に闘ひし者一人として敗を取らざるはなし、さればハミルトンの應諾の一言は恰も自己の生命を抛ちて敵手に投せるに等し。

* * * * *

ハミルトンは死の數日の後に迫るに拘らず、従容として平日の如く其の法律事務を處辨して以て委託者に對するの義務を完了して遺す所なからしめ、而して後徐に死後の計を爲す、家族に對する遺言を認めて、親友三人を擧げ身後の萬事を託せり、當時其の傍に在りし者の言に依るに、彼の舉動は少しも變態を現さず、其の秀朗なる容貌には一點の曇を來さず、其の法廷に於けるの辯論は平日に比して更に一段の雄壯を加へ、更に多くの精神を籠むるを覺えたりと。

ハミルトンは其の妻に遺書して、余は我が愛する妻の尊敬を失ふに至るべき條件の外に於ては總ての方法を盡して之を避けむと勉めたりと云ひ、其の妻に及ぼすべき苦痛に就ては深く詫び、又其の朋友に遺書して、余は決闘を欲せず、余の宗教及び道徳上の主義は之を許さず、且余は同胞の血を注ぐに忍びずと云ひ、我が妻子は余には最も戀し、彼等の幸福の爲には我が生命最も必要なり、且余は我が債權者に對して猶盡すべきの義務あり、余が死後其の財産を賣却するも猶多少の損害を興ふるを免れざるべし、是れ余の深く遺憾とする所なりと云ひ、余はブール氏に對しては政治上反對者としての動念態度の外に、私に言行の彼れに及ぼせしものなしと云ひ、其の體面を重むる義務を重むる、恩愛の情に溫なるの性情は文字の間に表出し、人をして天晴士君子の面目を感得せしむるものなりと云ふ。

斯て凡ての準備終りければ、ハミルトンは其の友ベンツルトンをして其の會合の時日を定めしめ、千八百四年七月十一日午前七時を以て彼等はニューヨーク州の對岸ホ

ツトソン河の西岸に沿ふウィホウケンの小丘に會合せり。ハミルトンは此の日早朝是れぞ父子夫婦の永訣とは夢にも知ぬ妻子の機嫌よき握手に斷腸の暗涙を濺ぎ、其の介添人なるベンツルトンを伴ひ來りしが、ブールは其の介添人バンネッスと共に先づ在り、式の如く決闘に關する順序を定め終りて、二人はピストルを以て立合へり、合圖の一聲に連れてブールは發射しぬ、彈丸はハミルトンの第三肋骨を打碎き肺臓を貫きて、深く脊骨に透りぬ、ハミルトンは敵を殺すの心なかりしを以て、其の遺書に認めし如く發射せざりしなり、介添の醫師は急速治療に取り懸れり、ハミルトンの友なるベンツルトンの腕に凭りかゝりありしが『是れ致命の重傷なり』と一言を漏せしのみ脈搏は絶へ呼吸微にして昏々として死境に入れるが如し、既にして傷軀を端艇に移し入れしに河上の清風は徐々として面を拂ひ、ハミルトンの精神漸く平常に復せしも、重傷は神仙の丹藥ありと雖も、遂に治すべからず、遂に妻子朋友環坐の中に於て宗教上の聖晚餐式を受け、溘然として長逝せり、年四十九。

此の偉人の死去は合衆國民をして深く悲嘆の情を起さしむ、從てブールを憎惡するの情は一時に昂騰し、遂に彼をして其の職を保つ能はずして、自ら身を引て西部に奔竄し、處々流浪の末到る處に指彈せられて窮死するに至らしめぬ、そは兎も角もハミルトンが從容死に對して迫らざるは決して常人の企て及ぶ所にあらず、道がに華盛頓に次げる米國大偉人の臨終後鑑とするに足るものあるなり。



第三十七 張巡 張興

唐の張巡は南陽の人、初真源の令たり、安祿山反する時巡兵を起して賊を討ず、賊の將令狐潮雍丘を攻む、潮固より張巡と舊知たり、因て巡に説て曰く、天下の事去る、足下堅く危城を守り誰が爲にせむと欲するか、巡曰く、足下平生忠義を以て自ら許す、今日の擧、忠義何に在るぞ、潮慙ちて退き復兵を益して之を圍む、巡部將雷萬春をして城上より潮と語らしむ、語未だ絶えず賊勢を以て之を射る、面に六矢を受く萬春動かず、潮遙に巡に謂て曰く、向に雷將軍を見、方に足下の威令を知る、然れども天道の與せざるを如何せむと、巡之に謂て曰く、君未だ人倫を知らず焉ぞ天道を知らむと、賊遂に去る、後許遠と共に睢陽を守る、賊將尹子奇之を攻む、城中食盡く、士卒と同一茶紙を食ふ、既に盡き馬を食ふ、馬盡き雀を羅にし鼠を掘る、既に盡き巡愛妾を出し殺して以て士卒に食はしめ、遠も亦其の奴を殺す、城中の人々必ず死するを知る然

れども遂に叛くものなし、既にして賊城に登る將士病で戦ふ能はず、巡西向再拜して曰く、臣が力竭きぬ、城を全ふする能はず、生きて陛下に報するなし、死して當に厲鬼と爲て以て賊を殺すべしと、城遂に陥り巡遠共に殺さる、巡城樓に登り笛を聴くの詩あり、

岩○堯○試○一○臨○、虜○騎○附○城○陰○、不○辨○風○塵○色○、安○知○天○地○心○、門○開○邊○月○近○、戰○苦○陳○雲○深○、旦○夕○更○樓○上○、遙○聞○橫○笛○音○。

唐の張興は東鹿の人、饒陽の裨將たり、史思明衆を引き城に至る、興單身城に乗り之を拒む、賊將に入らむとす、興一たび刀を舉れば輒ち數人算を亂して斃る、賊徒氣懾れて敢て迫らず、城陥りし時思明之を馬前に縛し好言して曰く、將軍は壯士なり、能く節を屈せず當に高爵を受くべし、興曰く、興は唐の忠臣固より降るべきの理なし、

我が命今數刻の内に迫る、願くは一言して死せむ、思明曰く、試に之を言へ、興曰く、主上祿山を待つ恩父子の如し、徳に報るを知らずして乃ち兵を興して闕を指し生人を塗炭にす、大丈夫凶逆を剪る能はず却て北面して之が臣と爲らむや、且足下の賊に従ふ所以のものは富貴を求むるのみ、是れ譬へば燕の幕に巢ふが如し豈能く久く安からむや、何ぞ間に乗じて賊を取へ禍を轉じて福と爲すに如かむ、以て長く富貴を享くるも亦美ならずやと、思明怒り之を鋸解す、興且に死せむとす罵て曰く、吾能く疆死の兵を集めて賊衆を敗らむと、軍中凜然として爲に容を改む。

* * * * *

張睢陽の城を守る猶我が楠公の金剛山に據るが如し、廓清の功は新田足利郭李諸人を待つと雖ども其の氣節を勵まし天下を風動せしや大なり、初城陥る尹子奇問ふ聞く君戦ふ毎に皆裂け齒碎くと何の爲ぞ、巡曰く、吾志既に賊を呑む但力足らざるのみ

と、睢陽の苦守遂に金剛山の巍然として動かざるに如かずと雖ども忠肝義膽自ら相照すものあり、巡も亦唐の楠公なる哉。



第三十八 ローランド夫人

無冠の女王ローランド夫人マナンは反對黨の指目殊に甚しく、竊に暗殺を企てむと欲する者あるを聞き、一時其の跡を韜晦し、再び時の至るを待たむと決意し、村婦の野服に身を變じ、竊に巴里を脱せむと謀れり、傍人告るに其の髪飾の美麗にして服と相協ざるを以てせり、マナン忽ち悔て曰く、吾豈青天白日の身を以て、故に服を變じて田舎婦人を扮するの拙劇を演せむや、唯應に我が信ずる所を行ひ、正義と共に死すべきのみと、既にしてロベスピエルの黨マナンを捕へて死刑に處せむとす、マナン斷頭臺に上り遙に自由の神像を望み、長嘆して曰く、嗚呼自由よ、古來汝が名に於て殺されたるもの幾人ぞと、花顔遂に泥に委しぬ。



第三十九 喜 劍

大石良雄京都島原の妓樓に登りたるとき、薩摩の人喜劍なる者も其の樓に在り、喜劍は未だ良雄とは一面識あらざれども、豫てより良雄のさるものたるを聞き知りたれば、彼必ず主君の爲に仇を報するならむと竊に信じ居たるに眼前良雄が妓を擁してたわいなき様を見て、心大に憚びず、仍て私に良雄を一室に招ぎ微言を以て復仇の事を諷したるに、良雄何とも感じたるの状なき故る、此の度は赤裡々に直言勸告したれども、良雄放言高笑更に承服するの色なし、喜劍大に怒り罵つて云ふ、汝は犬武士なり、吾故に汝を遇するに犬を以てせむと、左足を以て魚肉を指間に挟さみ、良雄の面前に突き出して之を食はしむ、良雄匍匐首を低れて之を食ひ、且舌を出して喜劍が足の指を嘗む、喜劍益々怒り、良雄醉笑、怒笑の聲交々外に聞ゆ、斯て一年を過ぎ喜劍藩命に依り江戸に赴きたるに、時恰も赤穂義士復仇のことあり、喜劍之を聞き大に驚き、

悔て云く、我が目良雄を獸視したるは我が目の罪なり、我が口良雄を獸罵したるは我が口の罪なり、我が足良雄を獸食せしめたるは我が足の罪なり、我が心良雄を獸待したるは我が心の罪なり、我一身罪に浸る、吾死せむと、急に病と稱して郷里に返り、公私の用を辨じて江戸に來りたるに、其の時赤穂の義士等は皆切腹を命せられ泉岳寺に葬りたる後なりしかば、喜劍旅装を脱せず直に泉岳寺に赴き、恭しく良雄等の靈を吊ひ、我請ふ萬罪を地下に謝せむといひつゝ、刀を抜き屠腹して良雄の墓前に死す。

* * * * *

喜劍は矯激の人なる哉、然れども過を悔る此の如く、耻を知る此の如くにして、而して後初て日本男兒と稱すべし。



第四十

釋良价 釋宣鑑 釋宗杲 釋正覺

釋法心 釋祖元 釋紹喜 釋如一

釋宗純 釋坦山 巢林子 宗鑑

一九 正念坊

茫茫たる者は宇宙、漠々たる者は時間、對境のあるなく、又限界のあるなく、曠遠冲虚、大の又大、久の又久、玄々妙々、妙々玄々、固より思議底の外に在り。仰て蒼穹を望めば、大空渺茫一往際なし、星宿の燦爛たる、銀漢の浩蕩たる、森然として吾人の眼目を射來る、而も是れ宇宙列象の一局部に過ぐる能はず、聞く最近恒星の光芒も三百年にして吾人の網膜に達し、其の最遠(肉眼にて見得る)の者は五千年の久しさを經て初て見るを得べしと、其の悠遠なる實に驚神駭魂するに足るなり、然

るに我が太陽系統も亦銀漢中の一點光にして、無数の諸恒星系統と共に、ハーキユラス星宿の方に向て、空間を轉轉々地に進行しつゝあり、且其の所謂銀漢なる者も吾人の知得せる以外に於て猶許多の系統あるべしと、然らば則ち吾人が太陽系統と稱するものは果して宇宙の幾億分の一を充填しあるが、這箇の疑問に接着するときは最も進歩したる算數も亦如何とも爲す能はざるなり、實にやニュートンも言へりし如く、人間の知得したる智識は眞理の濱邊の一沙粒を拾ひて珍とするに過ぎず。

宇宙の森羅萬象中の最小最公最微なる一圓體あり、稱して地球といふ、固體と液體とを以て一塊を形成す、而も此の者の成形以來既に四千萬年を経過したりと云ふ、若し所謂星雲時代に遡りて其の年齢を問はゞ、何人も答を設くる能はざるなり、更に將來の年月を考一考せんか、茫たり漠たり漫々として知る能はず、渺たる地球既に然り況や宇宙間に流轉成壞する萬象は幾千萬億阿僧祇劫を経來り、幾千萬億阿僧祇劫を歴去るべきや、到底區々たる人智の推知し及ぶ所にあらず。

地球の外皮に棲息するものあり、蠢々として蠕動すること蠶蠶の蛆の如し、而して此の輩の傲慢なる自ら稱して萬物の靈長と呼び、蟬蟬の短命を憫み、大椿の長壽を羨み、何の目的もなしに無限の空間に扯きづられ、否應なしに無極の時間中に生死し、自己の何處より來りて、何處に往くかをも嘗乎として知らず居るなり。此の憐むべき蛆蟲は利といひ害といひ、得喪といひ損益といひ、終日營々として、時には同類相食むの癡劇を演ずること數々あり、而も此の輩が右の如き争ひを生ずる打算の基位は極めて單純にして明白なるものなり、曰く生存を欲するが爲なりと、乃ち此の輩は生存を以て唯一の目的と爲すと共に死亡といふことを忌み嫌ふこと甚しく、絶對の苦痛畏怖は之に限れるものと爲すつゝあるなり、斯忌むべく嫌ふべき畏怖しの死亡は彼等が百方術を講じて回避するにも拘らず、人類有りてより以來今日に至るまで嘗て一人も首尾よく之を避得たるものなく、一人又一人、次第々々に捕へ去られて肉腐れ骨朽て漸く跡形を留めずなりけり、是れ獨り人類に限るにあらず、有情非情を問はず、生

るものは皆同一の運命を有す、死は實に必然にして而も平等なり、古人詩あり、

天覆地載如洪爐、萬物死生同一塗、其中松柏與龜鶴、得年稍久終摧枯、

借令真有蓬萊仙、未免亦居天地間、君不視太上老君頭似雪、世人漫說駐紅顏、

死は實に畏怖すべく嫌惡すべきものならむ、而して有生の萬物凡て其の支配を免る

こと能ざるは何人も疑はざる所なり、既に死の必然にして且平等なるを知りながら、

平生生者必滅の理の聞くを喜ばず、其の健全なる間は己れの何時死者の伴侶入りをす

べきやを料らず、否之を料るを欲せざるは矛盾の奇も此に至つて極まる、一旦死の近

くを死るや啼泣號哭殆ど所謂靈長者の品位を落し去るも願ざるなり、死の免るべから

ざる既に之を知り、知て而して狼狽す是れ亦矛盾の一奇なり、業平朝臣歌あり、

終○に○行○く○路○と○は○か○ね○て○知○り○し○か○ど○昨○日○今○日○と○は○思○は○ざ○り○し○を○

千古の人情此に盡きたり、而も是れ不覺悟千萬のことにして、斯るザマなればこそ威

嚇脅迫に屈し、榮華を歛み、偷安姑息を事とするなれ、姦邪も此より興り、盜賊も此

より興り、有ゆる人世の無道不義皆死の覺悟なきより起らざるなし、志士は溝壑に在るを忘れず、勇士は其の元を喪ふを忘れず、死に對するの覺悟如何に依りて、一毫千里の差違を致すこととなるなり。

更に一步を進むれば、人既に死の必然平等なるを知る以上は、死其のものを懼る、

も詮なし、餘す所は死の來る遲速如何のみに歸す、成程一分は確に一秒よりも長し、

然れども之を一時に比すれば甚だ短し、一年は一日より長きは定なり、去れども之一

世紀に比すれば亦甚だ短し、人間界に於ける時間の長短は好し多少の差違あるにもせ

よ、一旦之を絶對無限の前に置くとときは、百千萬年も亦黃梁一炊の夢よりもはかな

し、況や蛆蟲に等しき人間の壽命の如きをや、寄語す世間の擾々たる人々よ試に静夜

默坐仰て天象を觀、伏して之を明快する理想に訴へ、人生の甚だ么微たるを觀じ來れ、

必ずや豁然として大に自ら省慮する所あらむ。

* * * * *

釋良价世に洞山と號す、唐の咸通十年三月朔日命じて髮を剃らしめ法衣を披、鐘を鳴さしめ、奄然として逝く、時に弟子輩悲號限なし、价忽ち目を開きて起て曰く、夫れ出家の人は心物に依らず、其れ眞の修行、若輩喧囂を事とする勿れと、主事の者をして齋を營ましむ、曰く、此の齋は愚痴と名くと、蓋し其の般若なきを責むるなり、齋畢り浴を取り端坐して絶つ。

釋宣鑑世に徳山と稱す、其の道芳馨、禪徒輻湊す、咸通六年十二月三日忽然諸徒に告て曰く、

捫空追響、勞汝神邪、夢覺々非、復有何事、言ひ訖り安坐遷化する。

* * * * *

釋宗果徑山と號す、初圓悟、侍者となる、宋の紹興七年雙徑に住す、一日圓悟の訃音至る、徑山自ら文を選り祭を致し、即晚小參(參彈の小會)に擧すらく『僧長沙に問ふ、南泉遷化し甚れの處に向てか去ると、沙曰く、東村に驢と作り、西村に馬と作る僧曰く、意旨如何、沙曰く、騎らむと要せば便ち騎れ、下らむと要せば便ち下れと』若し是れ徑山ならば即ち然らず、若し僧あり圓悟先師遷化して甚れの處に向てか去ると問はゞ、他に向て道はむ、大阿鼻地獄に墮つと、意旨如何、曰く、日々に飢ては洋銅を餐し、渴しては鐵汁を飲む、人あり之を救ひ得や無や、曰く人の救ひ得るなし、曰く、如何ぞ救ひ得ざる、曰く、是の老が尋常の茶飯。

二十八年八月九日衆に謂て曰く、吾翌日必ず行かむと、五更手書して後事を理す、僧あり偈を乞ふ、山大書して曰く、
生也秬糜、死也秬糜、有偈無偈、是甚麼熱、
委然として逝く。

釋正覺宏智と謚す、宋の紹興二十七年九月七日、郡帥の檀越より返る、飯客常の如し、翌日浴を索め衣を更へ、端坐偈を書して曰く、
夢幻空花、六十七年、白鳥煙没、秋水連天、
筆を擲つて逝く。

釋法心壯歳を過ぎて出家し一字を解せず、宋地の禪宗盛なるを聞き、商船に乗じ臨安に入り、直に徑山に登り佛鑑禪師に見ゆ、師圓相中に一丁字を書して之を示す、心止つて單提研究す、性堅硬にして神坐に耐へ、骨體癭爛するも撓ざるもの九年、初萬物の中皆丁の字を現す、心竊に屑とせず、漸く歳序を経、始て平穩なるを得たり、

歸朝して奥州松島に居る、臨終に先つこと七日其の徒に謂て曰く、某日當に滅を取るべしと、然れども心が身體微恙なし、侍者之を信せず、期日に至り齋し罷み床に上り坐禪す、侍僧遺偈を乞ふ、心元書する能はず即ち唱て曰く、
來時明々、去時明々、是箇何物、
後句を言はず、侍僧曰く、猶一句を缺く、望らくは之を足せよ、心聲に應じて喝一喝泊然として逝く。

釋祖元無學と號す宋末の僧なり、初温に在りし時元の兵至る、境内皆奔竄す、元獨り堂裡に兀坐す、虜將將に刃を頸に加へむとす、元動かす一偈を述べて曰く、
乾坤無地卓孤筇、喜得人空法亦空、珍重大元三尺劍、電光影裡斬春風、
群虜禮を作して去る、元後歸化して鎌倉に居り北條時宗の師たり、晩に偈を以て衆に

示して曰く、

諸佛丸夫同是幻、若求實相眼中埃、老僧舍利包天地、莫向空山撥冷灰、
衣を更へ端坐して筆を索め書して曰く、
來亦不前、去亦不後、百億毛頭師子現、百億毛頭師子吼、
筆を置て逝く。

釋紹喜快川と號す、武田信玄の師にして甲斐の慧林寺に住す、武田氏亡び信長兵を以て寺を圍み、衆徒百餘人を山門の樓上に追ひこみ、薪を積み四面より火を放つ、喜垂示して曰く、諸人即今大火燄裡に向て如何か大法輪を轉じ去らむと、即ち唱へて曰く、

安禪不必須山水、滅却心頭火亦涼 (古句)

衆と俱に焚死す。

釋如一如非と號す、將に遷化せむとす、侍者遺偈を乞ふ、一曰く、我若し偈なければ終に死するを得ざるか、侍者益す乞ふて止まず、乃ち筆を揮て曰く、

生如是、死如是、坐斷生死關、觸破沒巴鼻、喝、

筆を置き茶を啜り自ら胸を開て曰く、快活々々と起て香を炷き、泊然として逝く。

釋宗純一休と號す、其の母末期の消息を觀ば師の人と爲りを知るを得べし、曰く

我等娑婆の縁盡き無爲の都に赴き候、御身よき出家に成りたまひ佛性の見を磨き、
其の眼より我等地獄に落ちざるか、不斷添か不添かを見たまふべし、釋迦達

磨を○も○奴○とな○した○たま○ふ○程○の○人○に○成○り○た○ま○ひ○候○は○俗○に○て○も○不○苦○候○、佛○四○十○餘○年○説○法○し○た○ま○ひ○終○り○に○一○字○不○説○と○宣○ひ○し○上○は○、我○と○見○、我○と○悟○る○が○肝○要○に○候○、何○事○も○莫○妄○想○あ○な○か○し○こ○、

一休末期の句に云く、

朦々而三十年、淡々而三十年、朦々淡々六十年、末期肝囊捧梵天、

借用申す昨月昨日、返済申す今月今日、

借置きし五のものを四つかへし本来空に今ぞもとづく。

* * * * *

釋坦山近代の高僧、常に曰く、禪子死期を知らずは何の爲むる所ぞと、死するの朝自ら郵便はかきを書し知人に報じて曰く、老僧正午に寂を取らむと、午に至り沐浴端坐して化す。

巢林子は近松門左衛門の號なり、其の著作は以て英の沙翁に比すべしと云ふ、辭世に云く、

代々甲冑の家に生れながら武林を離れ、三槐九卿に仕へ咫尺し奉りて寸爵なく、市井に漂ひて商賣を知らず、隱に似て隱にあらす賢に似て賢にあらす、物識に似て何も知らず、世のまがいもの唐の大和のをしへある道々技藝雜藝滑稽の類まで知らぬなげに口にまかせ筆にはしらせ一世を嘲りちらし、今はのきわにいふべく思ふべき眞の一大事は一字半言もなき倒惑、こゝろに心の耻をおぼへ七十餘り光陰、おもへばおぼつかなき我が世経をはむぬ、もし辭世はと問ふ人あらば、それ辭世さる程にさてもその後は残る櫻に花しにほは

* * * * *

山崎宗鑑は近江の人にして夙に能書の聞えあり、和歌連俳に長せり、其の辭世に、
宗鑑は何處へと人の問ふならばちよと用ありてあの世へといく

* * * * *

十返舎一九死に臨み門人等に遺命して沐浴せず直に火葬せよといふ人々その如く
取計ひて、和尚下火の文を読みさて火を點せしに、櫃炎々として燃あがれば忽ち燿爆
聲ありて數個の流星屍中より迸る、葬に會するもの錯愕瞠若たり、是れ豫め兒戯に供
する煙花を懷にせしなりと、渠生前膝栗毛諸作を以て人を翻弄して足らず、死後に於
ても亦此のいたづらを爲せるなり、辭世あり、

此の世をばドリヤお暇にせん香の煙と、もにハイ左様なら

* * * * *

昔時都近く岩鼻と稱する所の念佛庵主を正念坊といへり、もとは黒谷に居て念佛の
上手と呼ばれ、日々京に出で、托鉢をなすに人々其の聲の好きを愛して米錢などを多
く施しけるが、此の僧寺に在りて飯を焚きたるときは櫃に移して肩に載せ、佛前を一
遍づ、廻りながら『それ鯉げ』とて持來り、其後人にも食はせ自らも食ひて、別
佛器などへ盛りて供せしことなし、されども何にても佛前に持行きたる上にあらざれ
ば食することなし、漬物の壓にも石なき折は境内に建てたる石地藏を持來りて『鹽梅
よく漬けて下され』とて載せ置けり、總て無頓着なれども肉食するには寺にて食する
ことなく、又寺には老婆をも嫌ひて男のみを使へり、此の坊の書きたる一枚起請と辭
世とあり、

隱居一枚起請

もろこし我朝のもろこしの智者達の致し申さる、隱遁の隱にもあらず、又學問
して道の心を悟りて致す隱遁にもあらず、只不用の者の爲には世の妨となるまじ

とさへ心得れば疑ひなく氣樂なるぞと思ひとりし隱居するより外、別の仔細は候はじ、但し肝心の世渡と申すことの候へども、皆衣食住のうちにこもり候なり、此の外に慾深きことを存せば諸人の憐みにもはづれ候べし、假令薦をかぶり糲糠をなめ人の軒端に臥せるとも、食ひて寢、食ひて遊ぶ、君が代のありがたきを忘れなば、身は安樂になりたりとも生きたるかひもあるまじく候、あなかしこ。

辭世

來て見ても來て見てもみな同じことこゝらでちよつと死んで見やうか

死は固より避くべからず、さらばとて自ら之を求むるの愚なるは、死を避けむとして煩悶するも甲乙なし、求めず避けず、自然に安處して死に處するの覺悟ある、之を安心立命とは謂ふなり、佛耶の教此の外亦何物かあらむ、然れども吾人人間の弱點は

常に此の覺悟を抹殺して昏々たる醉夢の間に彷徨せしむ、是れ人世に迷執者の群がりて、覺悟よき立派の往生を遂ぐる者少き所以なり、さりながら死に對するの覺悟の如きは決して枯燥無味なる理窟の一點張よりして得べきにあらず、要する所平生の用意修養の如何に存するなり、余に言志のざれ歌十首あり、記して一粲を博す、

無しといへどたべとせがむをつれなくも涙で叱る憐れいとし兒
我のみを頼むわきもこ我ばかりおろかはなしと今もおもはなく
名も厭へ寶も厭へ我が身をも厭ひ棄てよといひにし聖
その聖物食ひおはし死にて後名まで殘せるおかしき聖
穢多き世をし厭はゞ我ひとり青海原をふむべかりけり
一片の甘きにつどふ蟻どもの醜の醜等を踏みて行かなむ
醜人の崇むる寶我見れば魚の目玉の白きを似たる

崩え出でし花しさかすは人の世をばかくしくも我はおもほゆ
露であれ幻であれ我が住める我が世をやはり我が世と見むかも
我が資人には告げし我が名をば石にはほらじ形なしにして

超死生
臨終壯快譚終

明治三十五年十一月五日印刷
明治三十五年十一月一日發行

臨終壯快譚

正價金廿五錢

著者 早田 玄洞

發行者 岩崎鐵次郎

印刷者 日置 市二

印刷所 小川印刷所

東京市神田區錦町三丁目一番地



著作權 所有

發 兌 東京市神田區鍛冶町十七番地 電話 本局三〇六七番 大學館

村上濁浪君著

冒險旅行術

正價廿五錢 郵税四錢

生と睹し、死

を決し高岳に溪谷に深林に沙漠に

七寸の草鞋を踏破して奇勝を探り、 險難

を冒す、 勇氣凜然、剛膽烈々、日

て爲すべき處なり。

本書 **世界各国に於ける**

冒險者が熱帶寒帯、北極南極、瘴烟毒霧

の地、 猛獸怪鳥の巷を跋渉した

つし、且 準備方法必須の條件を明細に詳悉せり。

鐵脚子著 岡落葉君畫

野宿旅行

正價廿五錢 郵税四錢

三個の風流 **菅笠に薦一枚**脚

漢あり、 草鞋の扮装、先づ行人を驚し、漂々

乎として東都を出て汽車の便を藉らず、

囊中の空乏元よ 青天井に草

り覺悟する所 枕、胸羅聲張り上げて蚊 一瓶の

正宗に天地を呑んで、中山道を、

奇談珍話抱腹絶倒すべき滑稽

消夏の好伴侶なり！

(前付の二)

木村鷹太郎君著

肖像寫入
數葉
ロニ文界之大魔王

正價四十錢 郵税四錢

要 大 次 目

- 第一編 英國に於ける詩人バイロン
バイロンの遺傳及其幼時
ケンブリッヂに於けるバイロン
「メイルドハロルド」の旅行
結婚、離婚、婦人の關係、英國訣別
- 第二編 外國に於けるバイロン
瑞西及エチオピアに於けるバイロン
ラズニナに於けるバイロン
ピサ及セノアに於けるバイロン
- 第三編 バイロンの思想、文學、哲學
天地觀及自我論
不平等及服世
人道と耶穌教との衝突
快樂主義
女性及愛戀觀
道徳觀
海賊及びサタン主義
- 第四編 英雄バイロン
イタリヤの秘密政黨及アンレニヤの獨立戰爭
バイロンの死

平野紫陽君著 岡落葉君

文學 奇 瑞 譚

正價廿五錢 郵税四錢

要 大 次 目

- 第一編 雨を祈り又雨を止めたる事
- 第二編 疾病を癒せし事
- 第三編 禽獸を感せしめし事
- 第四編 神人唱和
- 第五編 神人を感動せしめし事
- 第六編 不吉を變じて人の心を安からしめし事
- 第七編 罪禍を脱れ又罪禍を招きし事
- 第八編 人に侮られず且つ品位を高めし事
- 第九編 望を達する事
- 第十編 名號を得たる事
- 第十一編 恩賜に預たる事
- 第十二編 位階を得たる事
- 第十三編 他人の詩歌を應用する事

墨堤隱士著 肖像寫眞版入

大臣の書生時代

正價三十錢 郵税四錢

大禮服に勳章を帯びたる現
在は、いざ知らず、
短褐弊衣の腕白時代には、奇
妙々の珍談山の如
く、**未來の宰相**だけあつて、
滑稽の中に學
ぶべき處あり、亂暴の中に、膽氣愛すべ
き處あり、管にこ
の逸話を讀めば、**趣味の湧然**
たるを覺ゆるのみならず、立志の覺悟に
は**無比の興奮**たる好個の讀物
なり!

墨堤隱士著 肖像寫眞版入

日本富豪の家憲

正價三十錢 郵税四錢

- 次 目
- 三井家の家憲
 - 本間家の家憲
 - 松屋吳服店の家憲
 - 岩崎家の家憲
 - 大丸の家憲
 - 住友家の家憲
 - 中澤家の家憲
 - 安田家の家憲
 - 山本家の家憲
 - 澁澤家の家憲
 - 升本家の家憲
 - 白木屋吳服店の家憲
 - 鴻池家の家憲
 - 菊池家の家憲

(前付の三)

原田東風君著 岡落葉君畫

奇談 貧乏旅行

正價二十五錢 郵税四錢

貧乏旅行は即ち貧乏人の旅行、已に貧乏人なり、囊中は乏し、空乏なる囊中を以て**長途の旅行**を試む、**野宿**は勿論の事なり、**飢餓**は覺悟の前より、**進めば**愈々**究**し、**究**して此に**智慧**生じ、**勇氣**於てか、此に**失策**となり、**意外の歡迎**となり奇談百出珍話千出**一讀妙味**云ふ可からず、

村上濁浪君編 寫眞版數葉入

世界第一譚

正價二十五錢 郵税四錢

世界第一瀑布の探險
世界三大不思議
世界第一金剛石の來歴
長壽者躰
世界第一英雄、シーザー
古今大物語
奈良大佛世界漫遊記
萬國珍物博覽會
世界第一義士墓と遺物
赤穂義士の逸話
世界一の力持と鬨男
世界第一烈女シヤンダーク
世界名物膝栗毛
世界第一の名劍
人類學上の世界第一

(前付の四)

木村鷹太郎君著

孔子孟子荀子 人物養成譯

價參格錢 郵税四錢

●學生机上の良書!

孔子、孟子、荀子の**傳記**、主義、**理想**、訓言、**著書**、弟子養成の手腕悉く叙説評隲す、

性善説、**性惡説**、孟荀兩家が根本より見解を別にして、各滔々數萬言となる其間の**活動面目**は蓋し一讀せざる可からざるの點

●教師心携の寶典!

●教師心携の寶典!

墨堤隱士著

博士苦學談

價二十五錢

徒らに陳腐の**倫理道德**に依つて情熱炎々たる青年を馴致せんとす迂愚も亦甚しかな

敢て本書を出版して、文學、法學、工學、醫學、農學、理學、林學の諸博士數十人が

青年時代の苦學談を青年諸氏に示すもの豈他あらんや、

向上の精神に富み希望の光を望み**成效に餘念**なき青年諸氏は本書を讀んで益々三省發奮せざんば已まざらん。

(前付の五)

早田玄洞君著 岡落葉君畫

鍊膽夜間遠足

價貳拾錢 郵稅四錢

夜間遠足の利益左の如し！

一 夜間の旅行は最も費用を節約し得
二 夜間の旅行は避暑の目的に適合す
三 夜間の旅行は心勝修練に益あり
夜間遠足か如何に奇談珍話
に富むか左の目次の概畧を一覽せよ！

- 怪しの女
- 泥棒々々
- 英雄の跡
- 犯罪の嫌疑
- 拘留
- 拘摸捕縛
- 犬の襲撃
- 乞食問答
- 夜の富士
- 暗闘
- 無一物
- 圖らぬ馳走

河村北溟君著

深山仙術修行奇談

價廿五錢 郵稅二錢

深山の絶頂に登て 天界の諸星

の機密を探り、幽谷に下つて、**狐狸**
と談じ深林に入つて、**山猿**と戯れ、
果實を食ひ清泉を掬し、樹下石上に**座**

禪の工夫を凝し、頭髮髦々とし

て、五臓鶴の如く疲せ、始めて**神通**

自在妙不可思議の術を得

たりと稱す、偽か真か試みに一讀して、
仙術の妙を探究せよ

柴田流星君著 岡落葉君畫

海之冒險奇談

價廿五錢 郵稅四錢

英國の少冒險小説と讀む而も
年は好て海に關するものなり、英吉利本國の
人は海に關するものなり、英吉利本國の
人士が四**太陽**と見ざるな
六時中と誇るに
しと誇るに

本書は日本男**海之事業**と
兒が成せる**金華山沖**に
親切に、正直に**風暴**
述べたるものなり、**郡司大尉**と
と戦ひ、**露**
占守島に**露**
領**コマンンドルヌキ**

島に萬歳を唱ふる**海國男兒**の
伴侶！
まで痛快壯絶

森脇星江君著

禪學無一物修行

價二十錢 郵稅四錢

禪學の奧儀は深遠にして容易

恰も深山に登るが如き乎、羊腸たる險路

幾千**彷徨躊躇**迷はざるものなし

本書**家**と捨て、**妻子**と捨て、

俗念を絶、**塵慾**を厭離し**無の**

意義を悟らんとしたる**自叙體**

に記したるもの、唯に禪學に志すもの、

みならず、荷くも事業學**無比の**

間に志すもの、爲めに**無比の**

鉄鞭り、**膽力養成**の珍書なり

(前付の七)

(前付の六)

豪傑叢談

洋裝 全 部 拾 冊 正 價 一 圓 五 角 郵 費 四 錢 稅 錢 貳

第 壹 編 宮 崎 來 城 君 著
第 八 版 **多 情 の 豪 傑**

第 貳 編 宮 崎 來 城 君 著
第 六 版 **豪 傑 の 臨 終**

第 參 編 宮 崎 來 城 君 著
第 四 版 **豪 傑 の 少 時**

第 四 編 岩 井 松 風 軒 著
第 三 版 **豪 傑 の 遺 訓**

第 五 編 宮 崎 來 城 君 著
第 貳 版 **豪 傑 の 雅 量**

目次左の如し
 ○源頼朝○源義經○平重衡○木曾義仲○曾我祐成○楠正行○藤原藤房○高師直○尊良親王○高師秋○新田義貞○新田義興○平通盛○柴田勝家○平維盛○豊臣秀吉
 豪傑の氣象は臨終の間に於てこれを見る、來城子獨擅の健筆を振つて無數の古豪傑が臨終を描く一讀慟夫も起つ可く鬼神も泣くべし
 此は三寸にして人を呑むの概あり、豪傑の豪傑たるはそれ天品に依るか又聞く大器晩成の語あり豪傑の豪傑たるはそれ鍛練に依るかこれを知らんと欲せば須らく豪傑か少年時代の言語學止に徴せよ
 創業は易し守成は難し、英雄の苦心はその子孫の業に在り、遺訓を遵守するもの以て榮へ背戻するもの衰ふるは歴史に徴して明なり、有爲の青年なるもの一冊を座右に置いて朝の鑑とすべし
 諸豪傑が亂世に於ける慣用手段たる權謀術數以外に一種の天眞瀟灑なる襟度を以て人を迎へたる絶好の逸話、茲に例の健筆を以て寫し出されたるもの一讀光風霽月の想あらん

豪傑叢談

洋裝 全 部 拾 冊 正 價 一 圓 五 角 郵 費 四 錢 稅 錢 貳

第 六 編 西 山 筑 濱 君 著
豪 傑 の 交 際

第 七 編 岩 井 松 風 軒 著
豪 傑 の 信 仰

第 八 編 西 山 筑 濱 君 著
豪 傑 の 修 養

第 九 編 宮 崎 來 城 君 著
續 多 情 の 豪 傑

第 拾 編 西 山 筑 濱 君 著
豪 傑 と 奥 方

交際は即ち處世法なり交際に拙なる者は世に遅るゝは自然の數なり、異色異種の人物交々來り接す此間に處して如何に談話し如何に待遇すべきや豪傑が苦心また甚だしきものあり此書これを讀いて些の餘蘊を見ず
 英雄豪傑の壯業偉蹟は實に堪れが信仰の産物なり、神か、佛か、人か、物か、道か、理か、物か、渠等は其の一の或ものを崇拜して以て志を成したるものなり本書詳に之を明ふ
 大事業の下には大なる準備あり偉人の素には大なる修養あり修養は活動の第一義なるの語を知る者須らく此書に就て如何に英雄豪傑がその素養に力むるに困苦勉勵せしかを見よ
 蓋に、多情の豪傑一篇を著して滿天下の耳目を驚倒したる著者更に其洩れたる戦國の勇將猛士が情事に寫す瑰奇優麗の筆致は脱くを用みず讀む者恍惚として自失せずんば幸のみ
 豪傑を知らんとするには先づ夫人の研究を要す、女子か男子に及ぼす勢力等大なるものあればなり、此書或は叙説し或は評論し俊逸と佳人双々點綴する處一部小説を讀むの感あり

池田錦水君著 岡落葉君畫

戀の一年有半

再版 價廿五錢 郵稅四錢

戀愛は青年の花なり、戀愛を一概に排斥する者は未だ以て人世を語る可からず、戀愛は人生の慰藉なり、花は人に香あり、月は人に光あり、一度風吹き雲起らん乎、戀愛は人生の惨劇なり、一年有半に於ける多様な戀愛を登らん、と欲せば、本書これを容易に説明す。

池田錦水君著

婦人と戀愛

三版 價廿錢 郵稅四錢

婦人の通有性人生と戀愛の發動、一時的戀愛虚誇的戀愛、實質的戀愛、命夫人の戀、細君の戀、町娘の戀、後家の戀、外家の戀、令嬢の戀、都會の戀、女學生の戀、町娘の戀、下婢の戀、藝妓の戀、結婚會と田舎婦人戀愛概説。

池田錦水君著 小山榮達君畫

奥様と嬢様

價廿五錢 郵稅四錢

奥様とは如何に経歴技能理想品性嗜好娛樂滑稽言語動作、職務社交奥様に寄す嬢様とは如何に世間的智識學術的智識藝術的智識希望嗜好遊戲學止言語交際將來嬢様に寄す。

池田錦水君著

社會女心の解剖

再版 價參拾錢 郵稅四錢

(容貌)美人、十人並、醜婦(年配)老婆、年増、新造、少女、(風土)關西婦人、關東婦人、海邊婦人、山國婦人、都會婦人、田園婦人(職業)女教師、女醫師、女舞師、歌女、女工、女役者、嬢様、女娼、女按摩、傳母、下女、外妾、洋妾、女役者、嬢様、女娼、女按摩、傳母、下女、外妾、洋妾、賣淫婦、妻女、女娼、女按摩、傳母、下女、外妾、洋妾、生町娘、阿蘭(世外婦人)後家、尼、諸君と結婚(婦人一貫の心情)。

池田錦水君著 岡落葉君畫

無錢修學

價廿五錢 郵稅四錢

本書の目的は青年が苦學力行を奨励するに在り、因循姑息の念を除去するに在り、獨立自活の法を教ふるに在り、目次を分つ事第二十新聞配達となり、立坊となり、貸家捜となり、托鉢坊主となり、車夫となり、種々な心困難の境遇を小説的に描き出す、附録として、別に學生自活法を添へたり。

原田東風君著 岡落葉君畫

暗黒の青年時代

價廿五錢 郵稅四錢

余が郷、余が家の歴史、境遇及び幼時、亂暴時代、自活、出奔、苦學、學校時代、東京第二の若學、官吏、失敗、墮落、歸省、郷里の變遷、新聞社生活、第二の東京、前途、光明を認め、一道の話路を求めんとする青年は本書を讀んで準備せざる可からず。

井上陞々君著 岡落葉君畫

遊學書生

價廿五錢 郵稅四錢

本書は無邪氣無垢の青年が東都に遊學して周囲の惡風に依り誘惑に乗つて不識不知墮落する傾向を小説的寫實的に描きたるもの、皮肉文字は如何に讀者をして印象深かり、著者得意の皮肉文字は如何に讀者をして印象深かりしむるや乞ふ精讀して文字以外の趣味を覺れ。

原田東風君著 小山榮達君畫

木賃宿

再版 價廿五錢 郵稅四錢

社會の暗面を知らんと欲せば、先づ下層の生活を研究すべし、下層の生活を探索せんと欲せば、その最も適切にして複雑なる木賃宿を觀察するを便とす、木賃宿の活寫よ、く社會の罪惡、病源を指摘して餘すなからんとす、而も此事實に非ず著者苦心慘澹此著あり。

蛟龍子編

男東京學校案内

價廿五錢 郵稅四錢

東都に遊學する青年男女の爲め、東都百三十餘校の精在地入學規則、修業年限、卒業後の資格、試験科目、費用等、凡て最近の調査に依りて編成したるもの、記事は綿密にして正確なるは、編者の責任を帯ふる所なり。

矢野滄浪君著 岡落葉君畫

食客

再版 價廿錢 郵稅四錢

本書は著者が實踐せし事柄を言文一致を以て描かれたるものにして、食客が辛酸困苦の境遇不平憤懣の生活、むものをして、食客が辛酸困苦の境遇不平憤懣の生活、片々たる小説に比して、趣味優ること數倍なるのみならず、苦學の書生に慰樂を與ふること甚だ多し。

文學士白河鯉洋君序 宮崎來城君著

楊貴妃

版五 價廿參錢 郵稅四錢

帝國大學教授内藤耻叟先生序

靜御前

版四 價參拾錢 郵稅四錢

文庫博士三宅雪嶺先生序 岩井松風軒君著

小野小町

版參 價廿五錢 郵稅四錢

宮崎來城君著

國色史叢 第一編 虞美人

價廿五錢 郵稅四錢

宮崎來城君著

國色史叢 第二編 西施

價廿五錢 郵稅四錢

著者風に漢文學に精通し清國に歴遊して人間未見の書に涉獵すること多年其瑰奇無双の筆を以て天下無双の國色を描く材料斬新にして麗麗の逸話蒐羅して漏すなし一讀するもの身は二千年前に生れ面前貴妃が美貌に接し媚言を耳にするの感あらん

帝國大學國史科に於て、鎌倉時代國史を專攻せし著者が數十の奇書珍本を材料とし該博なる學識と流麗なる筆鋒に依りて靜御前が幼時より其最期に至る迄極めて正確に物事を記したるもの殊に其義經との關係の如きは最も詳細を極むるもの坊間散漫杜撰の詳傳とは同一の談に在らざるなり

極美の女流として、非凡の歌仙として的小野小町が九十二年間の生涯の榮枯盛衰を叙したるもの材料は正しく富文章は流麗暢達、從來不可思議の裡に疑惑を留めたり小町の事蹟は此書に依りて始めて明瞭に解決せられたり

楚の項羽が虞兮の歌を謡うて死別の血涙滂沱たりし事蹟は項羽本紀に一點の潤飾を與へたもの、而も虞美人が詳細に如何の消息を描破し來る、

國亡ひて山河あり英雄の遺恨長へに滅ひず聲色の禍害それ大なる城來獨得の才筆は實に風霜を挾み匂々血涙を含む

文學士辰巳小次郎序 岩井松風軒君著

淀君と太閤

版四 價廿八錢 郵稅四錢

本田種竹君序 長田偶得君著

維新豪傑の情事

版三 價廿五錢 郵稅四錢

渡邊修二郎君著

大久保利通の一生

版再 價參拾錢 郵稅四錢

文學士飯田吹萬君序 帝國大學侯野節村君著

偉人の言行

版再 價廿五錢 郵稅四錢

渡邊修二郎君著

青年と立身出世

版再 價貳拾錢 郵稅四錢

瀧志弱行の徒妄りに英雄の皮相を學んで精神を解せず天下滔滔として文弱優柔の弊に陥る、松軒此に感ずて此書あり、先づ筆を英雄好色論に起して萬文の氣を吐き絶代の英傑太閤の如きも淀君の色に溺れは六州の版一夢の中を奪はる、慘劇を叙すこの段極めて痛快一讀案を打て絶叫すべし、
醉うては枕す、美人の膝、醒めては握る天下の權、千軍萬馬九死の間に於て、猶且つ優々餘裕ある英雄が風流韻事閑日月の逸興を寫すに楚々たる筆致を以てす○桐野利秋○高山正之○梅田滋源○梁川星巖○坂本龍馬○蒲生君平○陸奥宗光○木戸孝九○後藤象次○坂本龍馬○助○西郷隆盛○佐久間蔭山○薄井小波○種田政明○森田節齋

博言博士イーストレーキ君著

英作文添削詳解

再版 價廿參錢 郵稅貳錢

「イ」氏門生の英作文數多を撰擇して、字々句々に精密の添削を加へ、其全文には全體の評論を下し、以て精密の作文練習の方針を示し、邦文を以て添削評論の理由を詳説したる英學界未曾有の珍書なり。

博言博士イーストレーキ君著

英和通辯 日用單話自在

三版 價參拾錢 郵稅四錢

英米日用の慣用語句一千數百を集めて之を二十種に類別し、同氏自ら正確の發音を施し加ふるに、末尾に單語數百をも類別に附し、初學者は勿論、特に中學生座敷に必須の良書なるべし。

菅野德助君著

フランクリン 自叙傳詳解

再版 價參拾錢 郵稅四錢

國民英學會講師として「實用英語」記者として英文の註譯を以て芳名噴々たる菅野氏が其精緻なる頭腦により、詳細の註解を下せしものなれば、坊間流布の蕪雜の書と其の選を異にするは勿論、實に中學生必携の書。

文學士宮本正貫君序 虎城山人編

作文必携 助字用法詳解

四版 價拾五錢 郵稅貳錢

也、矣、焉、乎、哉、耶、耳、爾、已、殆、哉、哉、夫、抑、耶、乃、敝、即、便、猶、尙、仍、等、の助字數百を類集し、各字の意義、用法、異同等皆實例を擧て詳説せり。

侯爵西園寺公望君題字 岡鹿門君序 財間榮君編

作文必携 熟語成句詳解

六版 價廿五錢 郵稅四錢

故事熟語數千を集めて、之を精密の意義、文字の出處、故事來歴を詳説して、之を「別」に區別し、尙ほ索引に便なる爲め種類目錄をも付し、あれば引用に便にして、文筆に従事せるもの座右必須の要典なり。

文學士宮本正貫君序 虎城山人編

漢文速成 和文漢譯秘訣

價拾五錢 郵稅貳錢

和語を漢語の語勢に變更する練習法なり復文十數例を擧げて、實字、虛字、助字の用法及語句の轉例配置を一字一字詳説し、又譯文の異同を識別し、譯文の運用變化を會得せしむる爲め同一文を數種に漢譯したる名家の和文漢譯例を示し、譯文の方法秘訣を詳説せり。

法學士加藤正雄君序 南海道人編 (插畫三拾二個)

書法秘訣 習字速成圖解

三版 價拾五錢 郵稅四錢

本書は永字八法、草字筆法、一文字五形修練術、忍返し筆法、執筆法等を總て圖を以て詳説し、其他執筆運筆、姿勢、習字、四修、習情、文學之價、筆勢、筆拍子、去欣、墨色、生字、死字、病字等の秘訣、魏大祖、王羲之、晉成帝、柳公權、東坡等の書法極意より書牘の種類、筆道の用具に到るまで詳細不漏。

緒方流水君序 石橋玄潮君著

新體詩指南

再版 價廿五錢 郵稅四錢

新體詩の性質を明にし、其作法を詳説し、附するに之が模範たる作例と、之を組織すべき資料たる類語を蒐集したるもの、新體詩自修の指南車は本書を措て何れに之を求めん。

石橋玄潮君編

韻文 花天月地

再版 價廿五錢 郵稅四錢

本書收むる所は、當時有名の新體詩人の作にして其萃を採り、其精華を選びて之を集む、其數七十有餘、題當に是れ四時、花鳥、風月の友天地の有情を教ふるものは即ち之なり。

文學士栗田木岡君序 渡邊幾石君編

美文資料 美辭麗句

三版 價廿錢 郵稅四錢

本書は部門を季候(春、夏、秋、冬)、地理、天文、人品、品性、人情及人事等に分ち更に百有餘の細目に分ち、以て索引の便を計り、蓋し作文の好資料にして、苟くも文筆を弄するの士が座右の友として裨益少なからざるを信ず。

早田玄洞君著

鍊膽夜間遠足

價 廿 錢

郵 稅 四 錢

暗々として咫尺を辨せず星斗隔干として、怪獸叫ぶ或
傷男子と雖も、心自ら静なる能はざるものなり、夜に於
ける山岳、夜に於ける深谷、夜に於ける町、夜に於ける
村、夜に於ける神社、夜に於ける娼樓、酒家、凡てこ
れ三更鐘聲陰々たる時、これを跋渉しこれを目撃しこれ
に逢着せるを寫せるもの、漫然たる旅行記とは蓋し一
泥の差違あるのみならず、膽力の養成を思ふもの先づ一
本を購ふて可なり、

池田錦水君著

戀の解剖

價 廿 錢

郵 稅 四 錢

初戀、見の戀、片戀、忍ぶ戀、道ならぬ戀、言はぬ戀、及ば
ぬ戀、逢へぬ戀、送けられぬ戀、虚偽の戀、誠實の戀、浮
氣なる戀、戀ならぬ戀、戀のつらさ、戀の悲しさ、戀の
うれしさ、戀のたのしさ等凡て戀愛の眞理を解剖して
餘蘊なし精神的戀愛を研究せんとする者は是非一讀せ
ざる可からず、

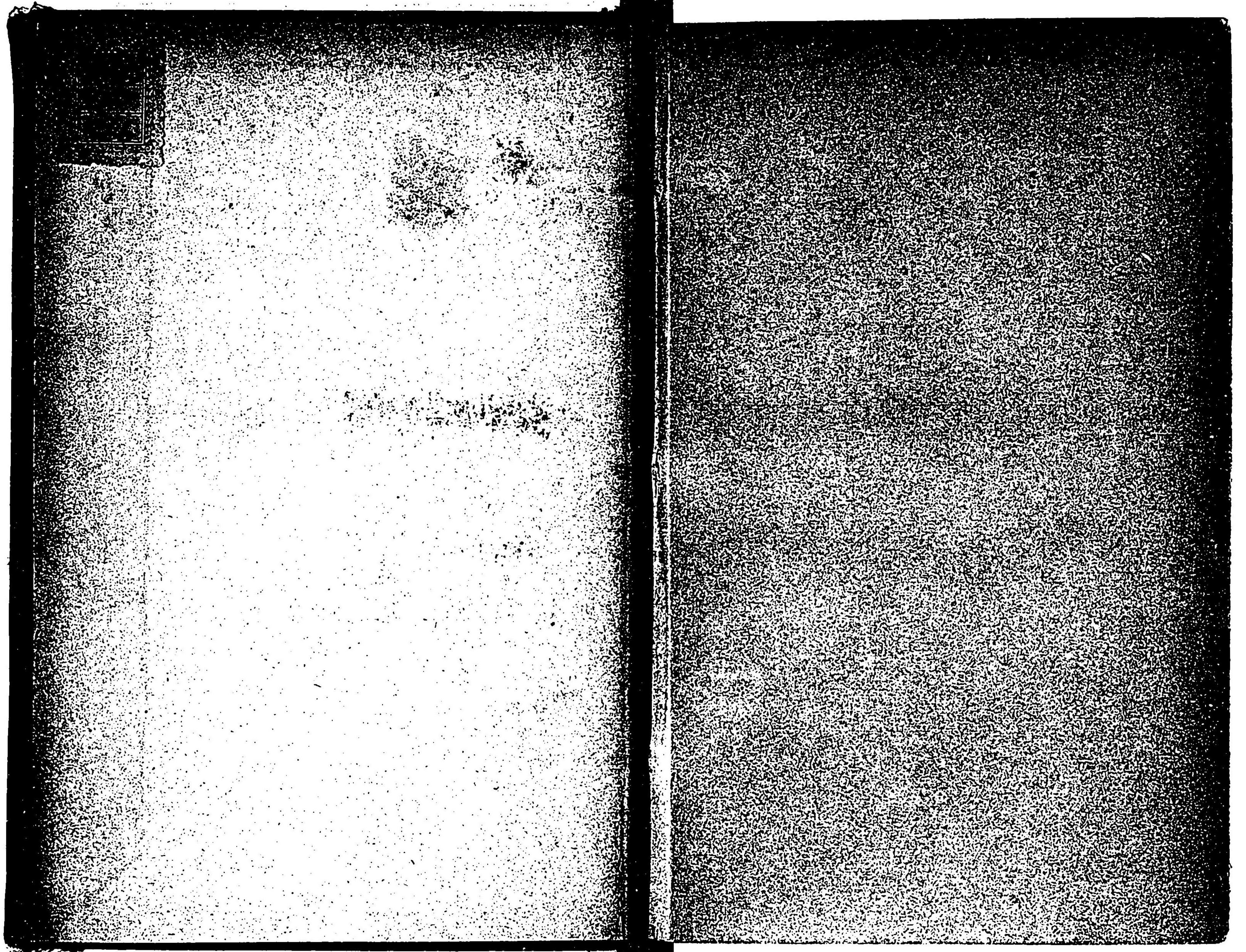
池田錦水君著

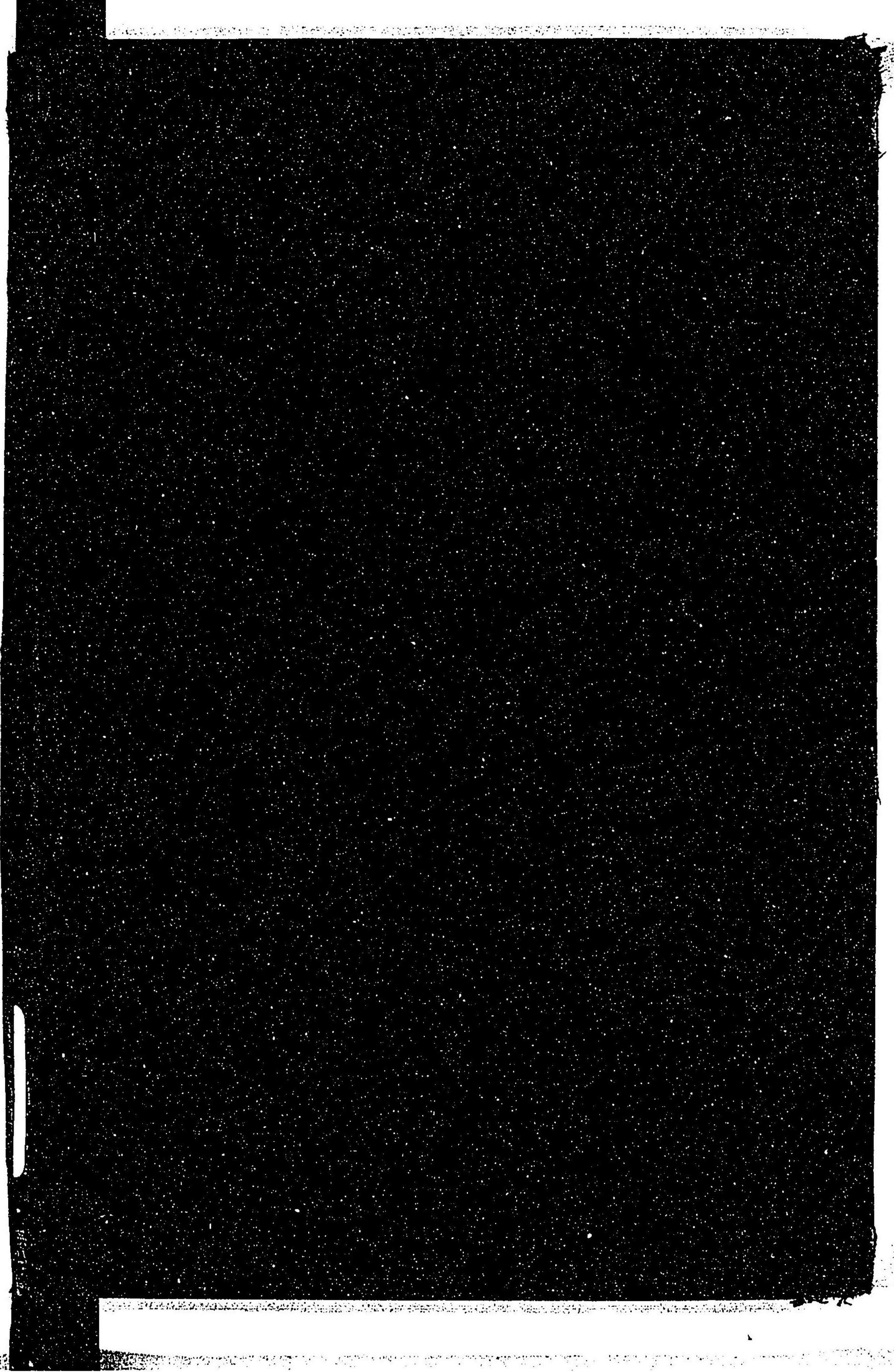
女學生氣質

價 廿 五 錢

郵 稅 四 錢

決心、決定、訣別、着京、入學、寄宿舎、見物、寄席、教場、
芝居、親友相談、轉宿、下宿屋、貸本屋、戀人、通、失
戀、自暴自棄、露見の名項に分ち當今の女學生氣質を
小説的に描きたるもの、行文の流暢にして趣味多きは
勿論よく時勢を穿ち得て妙旨ふ可からず、







004036-000-0

96-96

臨終壯快譚

早田 玄洞/訳

M35

ACE-0363

